

一般国道8号（加賀拡幅）改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

加賀市

松 山 D 遺 跡

2 0 1 3

石 川 県 教 育 委 員 会

（財）石川県埋蔵文化財センター

まつ やま
松 山 D 遺 跡

2 0 1 3

石 川 県 教 育 委 員 会
(財) 石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は松山D遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県加賀市松山町地内である。
- 3 調査原因は一般国道8号(加賀拡幅)改築工事であり、同事業を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は石川県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託して平成19(2007)年度から、平成24(2012)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査は平成19年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。
期 間 平成19年4月20日～同年8月8日
面 積 2,030㎡
担 当 課 調査部調査第1課
担 当 者 夷藤 明(調査専門員)、谷内明央(主任主事)
- 7 出土品整理は平成22(2010)年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書の作成は平成23(2011)年度に実施し、調査部国関係調査グループが担当した。執筆は第1・4章を谷内明央(調査部県関係調査グループ)が、第2・3章を谷内と岩瀬由美(調査部特定事業調査グループ専門員)が担当した。編集は谷内が行った。刊行は平成24年度に実施し、調査部国関係調査グループが担当した。
- 9 調査には下記の機関の協力を得た。
国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.(東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真とで対応する。

目 次

第1章 経 過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業・整理作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 層 序	7
第3節 遺 構	7
第4節 遺 物	29
第4章 総 括	42

挿図目次

第1図 調査区と試掘の位置	2	第2図 周辺の遺跡	4
第3図 グリッド配置図	8	第4図 遺構配置図1	9
第5図 遺構配置図2	10	第6図 遺構配置図3	11
第7図 遺構配置図4	12	第8図 遺構配置図5、トレンチ断面図	13
第9図 遺構配置図6	14	第10図 遺構図1	19
第11図 遺構図2	20	第12図 遺構図3	21
第13図 遺構図4	22	第14図 遺構図5	23
第15図 遺構図6	24	第16図 遺構図7	25
第17図 遺構図8	26	第18図 遺構図9	27
第19図 遺構図10	28	第20図 出土遺物実測図1	31
第21図 出土遺物実測図2	32	第22図 出土遺物実測図3	33
第23図 出土遺物実測図4	34	第24図 出土遺物実測図5	35
第25図 出土遺物実測図6	36	第26図 出土遺物実測図7	37
第27図 出土遺物実測図8	38	第28図 出土遺物実測図9	39
第29図 遺構変遷図1	43	第30図 遺構変遷図2	44

表 目 次

第1表 調査組織表	1	第2表 遺跡地名表	5
第3表 遺物観察表①	40	第4表 遺物観察表②	41

第1章 経 過

第1節 調査の経過

国土交通省北陸地方整備局(以下、国交省)は、南北に細長い県土の一体化や観光周遊性の向上、災害時の代替性確保や交通渋滞の緩和を図るため、幹線道路の複線化を進めている。一方、石川県教育委員会文化財課(以下、文化財課)は開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るために事前に事業内容の照会をしている。国交省は加賀市松山町地内に国道8号線の拡幅工事を計画し、埋蔵文化財分布調査を文化財課に依頼した。重機による試掘の結果、調査区域の一部で埋蔵文化財包蔵地松山D遺跡(古墳時代・古代の集落跡)が発見された。文化財課は分布調査の結果を国交省に回答し、双方協議の結果、工事の影響が遺跡に及ぶ箇所について発掘調査対象とすることで合意がなされた。

国交省は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は(財)石川県埋蔵文化財センター(以下、埋文)に発掘調査を委託した。調査は調査部調査第1課が担当した。

第2節 発掘作業・整理作業の経過

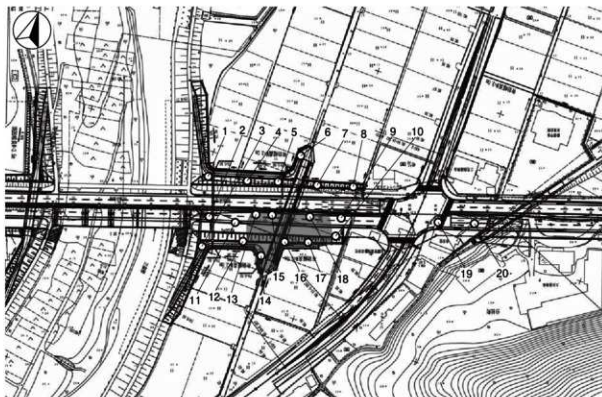
現地調査 平成19年4月20日に国交省・文化財課・埋文との間で現地協議が行われた。調査区内の農道は既存水路による損壊のため発掘しないこと、調査着手時期、仮設建物や排土の場所などについて確認した。5月7・8日に調査区西部の表土除去を行い、14日から作業員が調査に参加した。15日から遺構検出・掘削を行い、6月4日に空中写真測量を行った。5日に加賀市立動使小学校の6年生が遺跡見学に訪れた。6～8日に調査区東半部の表土除去、12日から遺構検出・掘削、7月27日に空中写真測量を行った。8月1～3日に埋め戻し、8日に器材を撤収し、現地作業は完了した。

出土品整理 平成22年度に文化財課は埋文に出土品整理を委託した。整理内容は遺物の記名・分類・接合、実測・トレースと遺構実測図のトレースである。

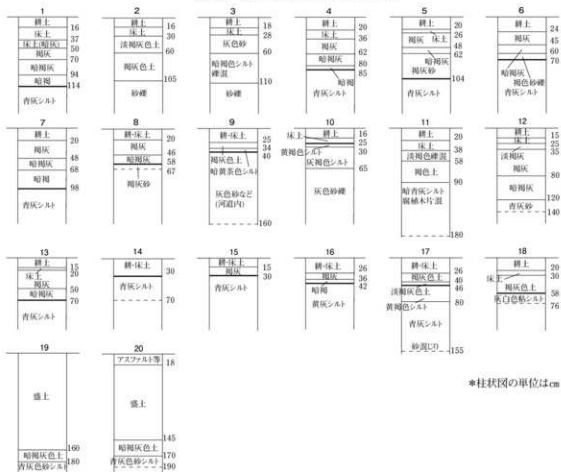
報告書作成・刊行 平成23年度に文化財課は埋文に報告書作成、平成24年度に報告書刊行を委託した。

第1表 調査組織表

調査期間	平成19年4月20日～同年8月6日	調査期間	平成22年9月27日～同年10月15日
調査主体	財石川県埋蔵文化財センター(理事長 中西 吉明)	調査主体	財石川県埋蔵文化財センター(理事長 竹中 博康)
総 括	前田 憲治(専務理事)	総 括	橋本 清(専務理事)
事 務	山下 淳映(事務局長)	事 務	栗山 正文(事務局長)
総 務	宅崎 仁芳(総務課長)	総 務	浅香 繁晴(総務グループリーダー)
経 理	熊谷 省吾(経理課長)		三浦 純夫(所 長)
調 査	谷内尾習司(所 長)	調 査	福島 正実(調査部長)
	瀧尻 修平(調査部長)		米沢 義光(特定事業調査グループリーダー)
担 当	三浦 純夫(調査第1課長)	担 当	谷内 明央(国関係調査グループ主任主事)
	夷藤 明(調査第1課調査専門員)		新谷 由子(特定事業調査グループ主任技術員)
作 業	谷内 明央(調査第1課主任主事)	作 業	馬場 正子(特定事業調査グループ主任技術員)
	新渡喜美江、新渡喜雄、石川嘉子、上出隆初、小西勝男、高山静枝、塚本庄太郎、土田昭一、中野幸裕、西川久志、西出忍、西本力次子、西本外賢也、橋本幸男、原田秀峰、前田幸二、山内昭男、山本富雄、山本義之、吉田健一、吉中 正和		林 かおる(特定事業調査グループ嘱託)
			西川 朗聖(特定事業調査グループ嘱託)
			表 容 子、角間洋子、小倉洋子、下村 薫



第1図 調査区と試掘の位置 (S=1/3,000)



*柱状図の単位はcm

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

松山D遺跡は石川県加賀市松山町に所在する。加賀市は石川県の南西端に位置し、北は日本海、東は小松市、南及び西は福井県に接する。市域は平成17(2005)年10月1日の旧江沼郡山中町との合併によって面積が303.99㎡に倍増し、1000m級の山々が連なる南部の山岳地帯から北部の日本海側までを含むこととなった。繊維・機械金属工業を基幹産業とする一方、再興九谷、山中漆器などの伝統産業、山代・片山津・山中の三温泉地からなる加賀温泉郷による観光産業なども盛んである。市域には国道8号線、北陸自動車道、JR北陸本線など、北陸地方日本海沿岸部の大動脈が東西に貫通している。

地勢は石川・福井両県の境にそびえる大日山(標高1,368m)を水源とする大聖寺川及び動橋川の源流部から河口部までの全流域を包括し、白山前山地帯、そこから続く江沼丘陵(標高200～300m)、日本海側に塊状に連なる洪積世の低丘陵である橋立丘陵(標高約60m)、及びこれらに扶まれた堆積小平野である盆地状の江沼平野などからなる。

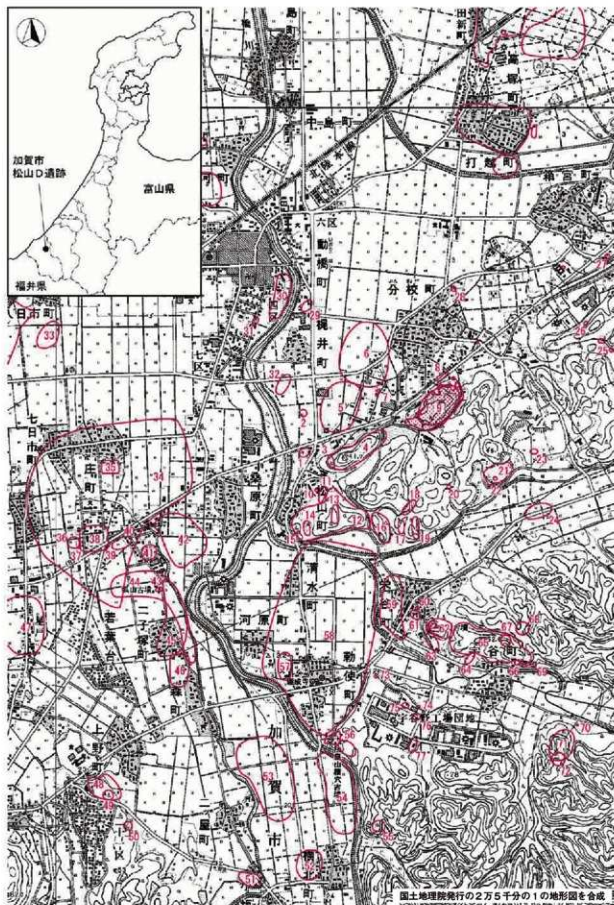
松山町は加賀市東部を貫流して柴山灣に注ぐ動橋川の中流域右岸に位置し、町南西端では小松市域から西流する那谷川が動橋川に合流しており、那谷川右岸にも当たる。小松市栗津方面から南西方向に張り出す丘陵の末端部に当たり、町域は丘陵部とその裾部、及び動橋川の氾濫原に当たる平地に渡っている。その丘陵北側には月津台地から派生する中位海成段丘が広がっており、本遺跡の東端付近まで延びている。本遺跡周辺は動橋川が江沼丘陵の狭小な谷底平野を縫うような流路から、開けた江沼平野に流れ出る地点に当たり、動橋川が大きく蛇行を繰り返した結果として形成された自然堤防と後背湿地が入り組んでいる。中・小規模の自然堤防上に現在の集落が点在し、低湿な後背湿地にあたると思われる場所が現在水田として利用されているが、本遺跡や松山C遺跡を始めとした周辺遺跡の調査成果から明らかのように、かつては更に細かな微高地が点在し、そのわずかな微高地に集落や古墳が占地していたことが知られるのである。

第2節 歴史的環境(第2図)

本遺跡周辺では旧石器時代に遡る遺跡は確認されておらず、人類の営みが確認されるのは縄文時代に入ってからで、津波倉遺跡(41)や打越A遺跡、横北遺跡(54)、宇谷野ヶ市野A遺跡(75)が低地、あるいは微高地、丘陵裾に点在する。中でも横北遺跡は後期中葉から晩期中葉の大規模な集落跡として知られ、当該期の良好な土器も数多く出土している。

弥生時代に入っても周辺域では二子塚東田遺跡(45)、勅使遺跡(58)が散見される程度であるが、北部の柴山灣周辺の丘陵裾部に前期末の標識遺跡である柴山出村遺跡を始めとして集落が展開し始め、後期になると同じく標識遺跡として知られる猫橋遺跡などでも活動が活発化する。本遺跡でもこの頃から遺構・遺物が確認されるようになる。

前時代まで散発的であった遺跡が古墳時代になると急増する。その大半は古墳群で、本遺跡東部、及び南東部に位置する丘陵部や動橋川左岸の河岸段丘上に数多く築造されている。前期に位置付けられるものとして円墳と方墳が確認されている分校チャカ山古墳群(4)、前方後円墳、円墳、方墳で構成される分校カン山古墳群(9)、円墳のみの松山古墳群(13)が近接地の丘陵頂部付近に占地し、中期



第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第2表 遺跡地名表

No.	経緯座標	遺跡名	出土品	築期	時期	備考
1	640000	松山D遺跡	骨土器、須恵器、土師器、埴輪、陶磁器	築部-古墳	弥生-中世	円墳2基
2	641600	松山C遺跡	須恵器、土師器、子持瓦、埴輪半、鉄刀、相模田石	築部	古墳・平安	
3	626900	分枝チャウ山古墳群		古墳	古墳前期	円墳3基
4	626800	分枝チャウ山古墳群		古墳	古墳前期	円墳・方墳
5	627100	分枝B遺跡		敷布地	平安	
6	627200	分枝A遺跡		敷布地	古墳	
7	627200	分枝山上古墳群	直刀、鉄鎌、刀子、玉、須恵器	古墳	古墳前期	円墳3基
8	638900	分枝C遺跡	中世土師器、瓦質土器、陶磁器、銅製瓦葺	墳墓-築部	室町-近世	
9	627000	分枝オノ山古墳群	鏡、鉄剣、鉄鏃、鉄鏃、管玉	古墳	古墳前期	前方円墳・円墳・方墳
10	626700	松山惣宮跡	陶磁器	築部	江戸末期	
11	626600	松山A遺跡	土師器、管玉片	敷布地	古墳前期	
12	626300	松山城跡		城跡	南北朝	
13	626200	松山古墳群		古墳	古墳前期	円墳5基
14	626400	松山B遺跡	土師器(壺形)	敷布地	古墳	早稲出土
15	626500	松山榑六		榑六瓦	古墳後期	
16	626100	松山東古墳群		古墳	古墳	方墳2基
17	625700	松山東跡群	須恵器	築部	古墳	3基以上
18	626000	分枝東跡群	須恵器	築部	古墳	5基
19	625800	分枝古墳群	須恵器	古墳	古墳	円墳3基
20	625900	分枝オノ山古墳		古墳	古墳	円墳
21	331500	那谷分北山山古墳群	須恵器	埴輪	元	須恵器第1基
22	331600	那谷分北山山古墳	須恵器	円墳	元末	須恵器第1基、 径10m、横13式石葺
23	331700	那谷純の本山古墳群	須恵器、土師器	埴輪	奈良・平安	須恵器第1基、土師器地成坑1基
24	333300	那谷B遺跡		築部	古代・中世	
25	331900	那谷大久保古墳跡		埴輪、埴輪	不詳	製鉄跡2、築部1
26	628100	和賀A遺跡	中世陶器	敷布地	中世	
27	628200	和賀B遺跡	中世陶器	敷布地	中世	
28	627100	分枝西山古墳	鏡、管玉、瓦片、小玉	古墳	古墳	前方円墳
29	627600	和賀養生センター遺跡	須恵器、土師器	敷布地	奈良・平安	
30	627700	動物保護跡		塚跡	中世	
31	640200	動物ハンター遺跡		敷布地	古墳・中世	
32	627500	和賀遺跡	須恵器、土師器	敷布地	古墳-平安	
33	621100	八日市遺跡	須恵器、土師器	敷布地	奈良・平安	
34	621200	庄-西島遺跡	須恵器、土師器	敷布地	奈良・平安	
35	628700	子塚遺跡		埴輪等	不詳	
36	623500	西島A遺跡	須恵器、瓦	敷布地	平安	
37	623400	西島B遺跡	相模田石、土師器	敷布地	奈良	
38	623700	津波金仏寺	須恵器、土師器、軒瓦瓦、丸瓦、平瓦	井寺	奈良	
39	623600	西島C遺跡	須恵器、瓦葺、土師口	敷布地	奈良	
40	623800	桑原遺跡	土師器	敷布地	古墳	
41	623900	津波金遺跡	縄文土器、石斧、石鏢、石鏃	築部	縄文	
42	624000	二子塚遺跡	須恵器、土師器	敷布地	古墳	
43	623200	狐山古墳	神鏡、鹿角付管、小玉、短甲、刀、柄、鉾、刀子、鏃、銅製等全具	古墳	古墳中期	国指定史跡、前方円墳、全長55m 組合式和式石葺
44	623300	二子塚古墳群	円筒埴輪、影象埴輪(人物)	古墳	古墳	前方円墳・円墳
45	623100	二子塚東山遺跡	骨土器、土師器、管玉、同原石、ガラス玉、鉄器、須恵器	築部	弥生-奈良・平安	
46	623000	二子塚カマミヤ遺跡	須恵器、土師器、布目瓦	敷布地	古墳後期	
47	607900	上野遺跡	須恵器、土師器、中世陶器	敷布地	奈良・平安・中世	
48	622900	上野西山跡群		塚跡	安土桃山	
49	622800	上野古墳群		古墳	古墳	円墳3基
50	622700	上野オコシ跡群	須恵器	築部	奈良・平安	
51	622200	小坂遺跡	縄文土器、土師器、須恵器	敷布地	縄文、奈良・平安	
52	622300	家跡古跡	土師器	井寺	不詳	
53	622500	小坂モリナシ遺跡	高野榑、蓋坪	敷布地	古墳-中世	
54	622600	横北遺跡	土器、石斧、石鏢、石鏢、石鏃	敷布地	縄文時期	
55	622400	横北榑六		榑六瓦	古墳後期	3基
56	624800	法皇山榑六群	方角銅鏡、直刀、刀子、鉄鎌、管金目、金剛、銅器	榑六瓦	古墳後期	国指定史跡
57	624200	動物保護跡	中世土師器、陶磁器、瓦葺、漆器	館跡	鎌倉-室町	
58	624100	動物保護跡	骨土器、須恵器、土師器、布目瓦、陶磁器	敷布地	奈良・奈良-中世	
59	625600	栄谷A遺跡	須恵器、土師器	敷布地	奈良・平安	
60	625500	栄谷宮の古墳	石棺	古墳	古墳	
61	625400	栄谷白山神社遺跡	須恵器、土師器	敷布地	奈良・平安・中世	
62	625300	栄谷白山榑六群	直刀、刀子、鉄鎌、金環、銅鏡	榑六瓦	古墳後期	国指定史跡
63	625200	栄谷B遺跡	須恵器、土師器	敷布地	奈良・平安	
64	625100	宇谷遺跡	須恵器、土師器	敷布地	奈良・平安	
65	626700	宇谷A遺跡		敷布地	平安・中世	蓋が遺法寺の可能性
66	625200	蓋が遺法寺跡		井寺	不詳	
67	642300	宇谷北遺跡		榑六・地下式坑	中世	地下式坑1基、榑六3基
68	642200	栄谷遺跡		榑六・地下式坑	中世	地下式坑2基、榑六10基
69	639900	宇谷高宮(山)神社遺跡		敷布地	奈良・平安・中世	
70	640300	宇谷中世墓		墳墓	中世	
71	624900	宇谷榑六遺跡		榑六瓦	古墳後期	
72		宇谷南遺跡(仮称)		地下式坑	中世	地下式坑4基
73	624300	宇谷野ヶ池野1号塚		塚	不詳	
74	624400	宇谷野ヶ池野2号塚		塚	不詳	
75	624500	宇谷野ヶ池野A遺跡	土器、石鏢、石鏃	敷布地	縄文	
76	624600	宇谷野ヶ池野B遺跡		敷布地	不詳	
77	624700	宇谷ノベノヲ遺跡	須恵器	敷布地	不詳	

には国指定史跡の前方後円墳、孤山古墳(43)が動橋川左岸に築造される。後期になると分校チャカ山西麓古墳群(3)、二子塚古墳群(44)などの円墳を中心とした群集墳、国指定史跡の法皇山横穴群(56)、栄谷丸山横穴群(62)などの横穴群が築かれている。動橋川右岸に立地する分校、松山地域の古墳群では埴輪が確認されていないのに対し、同左岸に立地する孤山古墳や二子塚古墳群では埴輪が出土している。これら以外にも数多くの古墳が詳細な分布調査によって周辺域で確認されているが、古代の集落遺跡である松山C遺跡で円筒埴輪片が出土しているなど、分校山王古墳群(7)や本遺跡のように、墳丘が消滅してしまったが故に未発見となっている古墳が他にも多く存在している可能性が高い。それら古墳の築造を支える人々の集落遺跡は確認例が少なく、二子塚東田遺跡(45)で玉造関連とされる竪穴建物が多数検出されている程度であり、他には須恵器窯である松山窯跡群(17)、分校窯跡群(18)、那谷金毘羅山窯跡群(21)などの生産遺跡が確認されている。この須恵器窯跡が構築されている丘陵は、小松市林町、戸津町から加賀市分校町、松山町にかけて良質な耐火粘土に恵まれていることから、古墳時代に始まる須恵器から中世の加賀焼に至るまで間隙を置きながらも連続と窯業生産が行われた地域であり、南加賀古窯跡群と総称されている。

奈良・平安時代になると集落遺跡が周辺に多く形成されている。松山C遺跡(2)、分校B遺跡(5)、梶井衛生センター遺跡(29)、梶井遺跡(32)、庄・西島遺跡(34)、西島A、B、C遺跡(36、37、39)の他、寺院跡である津波倉庵寺(38)も知られる。本遺跡から近至の松山C遺跡では狭小な調査面積でありながらも管理された用水路や板塀を検出し、江沼の異称の一つである「ヨネ」とも訓読可能な「米」墨書を始めた多量の墨書土器の出土から、江沼郡関係の官衙遺跡、或いは江沼臣氏の居宅かと推定されている。また、動橋川対岸に広がる西島A遺跡でも墨書土器や南北に軸を揃えた掘立柱建物跡が検出されていることから官衙関連遺跡かと推定されている。

中世以降については南北朝期に築かれたとされる松山城跡(12)、室町時代では集落跡及び墳墓が検出された分校C遺跡(8)、堡跡とされる動橋堡跡(30)、鎌倉・室町時代の館跡である勅使館跡(57)などが挙げられるが、それ以外にも那谷川の左岸側に広がる丘陵南西部などに宇谷北遺跡(67)や栄谷遺跡(68)のような中世横穴や地下式坑群が点在する程度で、集落遺跡は殆ど確認されていない。この時期になると、より安定した地盤を居住地に選定した結果、現集落と重なって未発見となっている遺跡も多いと推定される。江戸時代末期から明治初頭には丘陵裾の段丘部に再興九谷の松山焼窯跡(10)が操業している。

参考文献

- 平凡社地方資料センター 1991 『石川県の地名』 平凡社
 中西洋司ほか 2001 『加賀市松山C遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
 宮下幸夫 2007 『南加賀における地下式坑と中世横穴』『小松市立博物館紀要』第43号 小松市立博物館
 田嶋明人ほか 1978 『江沼古墳群分布調査報告』『石川考古学研究会々誌』第21号 石川考古学研究会
 谷内明央 2008 『分校C遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第20号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 平田天秋・橋本道夫 1973 『加賀市西島遺跡』 石川県教育委員会

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要 (第3～9図)

調査区は農道を挟んで西側と東側に分かれ、東側は更に耕作地への進入路として残した部分を挟んで北側と狭小な南側に分かれる。農道西側調査区では遺構検出高が5.0～5.1m前後で主に古代の土坑と溝、中世の溝を検出したが、西半部は動橋川の旧流路により遺構が流失している。更に、農道東側よりも遺構検出面が40cm前後低いことと、いずれの遺構も浅いことを考え合わせると、耕地整理の際にかなり削平を受けているとみられる。農道東側調査区では遺構検出高が5.0～5.4m前後で、弥生時代の柱穴、溝、古墳時代の円墳、古代の柱穴、中世の土坑、溝などを検出した。弥生時代の遺構は円墳2基を結んだラインより北東部にほぼ限られ、中世の遺構は同ラインより南西部にほぼ限られる。古代の遺構は同ライン周辺で柱穴が確認される。円墳の周溝内側にも少数基のピットが確認されるが、周溝外に比べると少なく、墳丘削平時に消滅した可能性と、古代の段階では墳丘が遺存していたために遺構が掘削されなかった可能性を想定し得る。

S D12が走る東端部は標高5.0m前後と低く、西半部の円墳付近は5.4m前後と高い。現在は平坦な田面であるが、動橋川による小規模な自然堤防が存在していたと推定され、狭小な微高地上に各時期の建物や円墳が集中して立地するものと判断される。東端部が低いのは、通称チャカ山とシロ山の間に小さな谷筋の続きが延びているためと推定されよう。整備された田面からは想像できないが、中位海成段丘、谷底平野、氾濫原、自然堤防といった地形が微細に入り組んでいた景観が復元されるのである。

調査は世界測地系に則った10mグリッドを設定し、南北方向をアルファベットで、東西方向をアラビア数字で表し、グリッド名は北西杭を以てA1区等と表した。

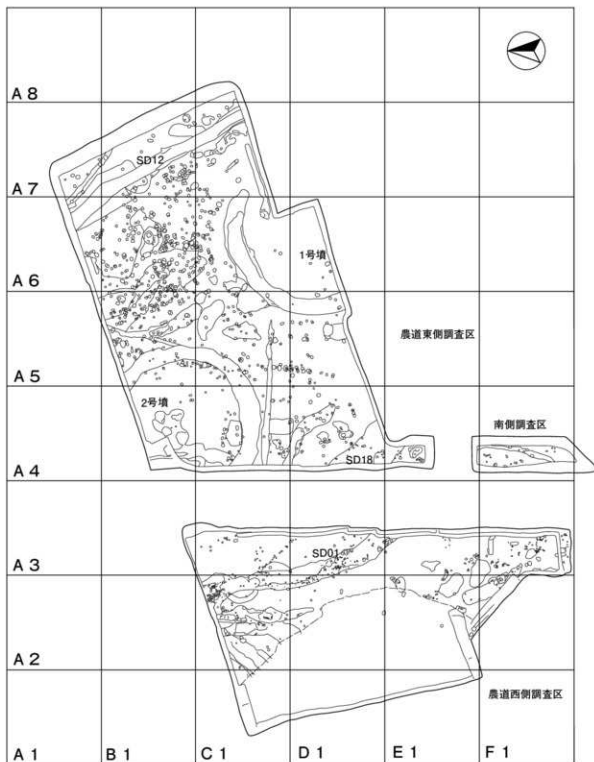
第2節 層 序 (第10・16・18図)

調査区北壁と東壁で基本の土層堆積を確認した。第10図の北壁の土層断面図では、第1、2層が現耕作土及び床土で、その下の第3層が古代包含層、第4層が弥生時代の包含層である。第5層は弥生時代の鞍部覆土であり、その下に黄灰色シルト～黄灰色粘質土の地山が広がっている。第1～3層は調査区全体に共通して堆積しているが、第4層は北壁のみで確認された。北壁土層観察地点周辺のB5・6区付近では第4層を切り込む古代以降の遺構と、基盤層を切り込む弥生時代の遺構があり、二面の遺構面を確認した。遺構覆土は主として暗灰褐色～褐灰色土が弥生～古墳時代、黒褐色土が古代、灰褐色～濁褐灰色土が中世である。

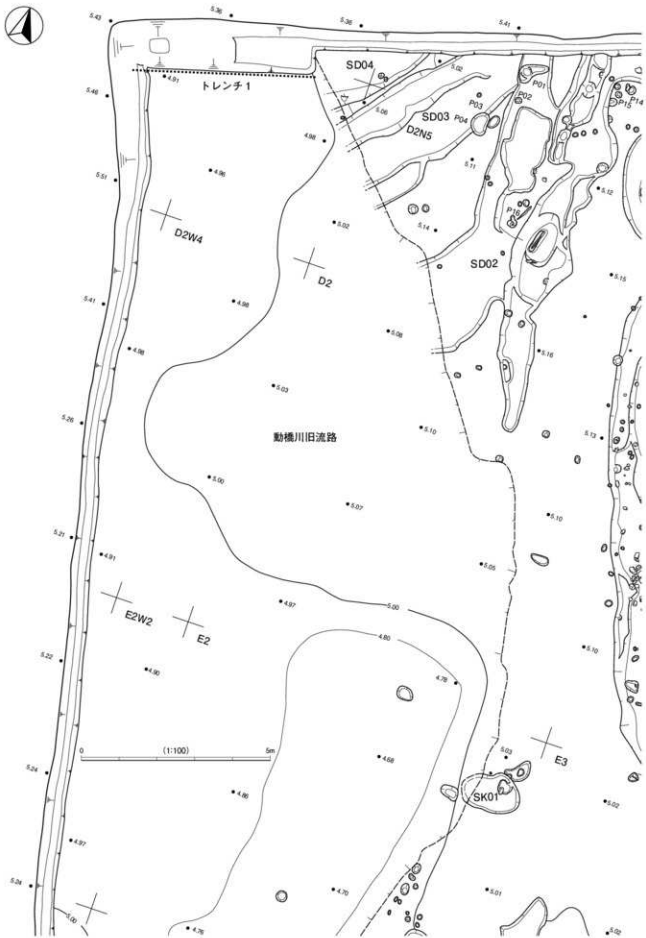
第3節 遺 構

1. 建 物 (第10・11図)

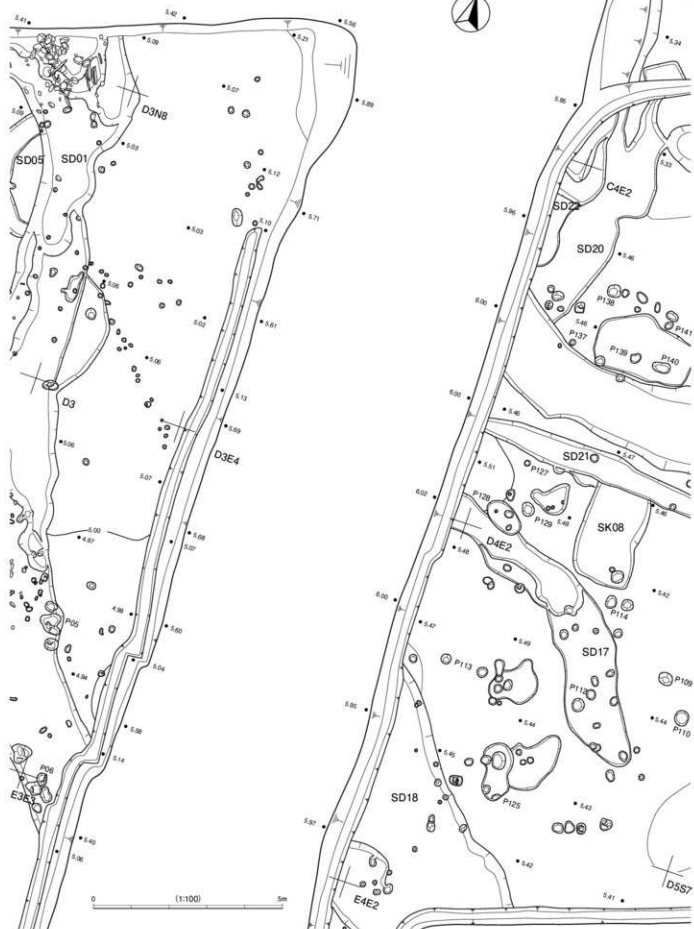
SB01 BC5・6区で検出した2間×5間、主軸N9°Eの側柱建物である。柱穴径は30～60cm、深さは22～40cm、柱間寸法は梁行北側柱列が西から2.4m、2.8m、桁行東側柱列が北から2.0m、1.8m、1.9m、



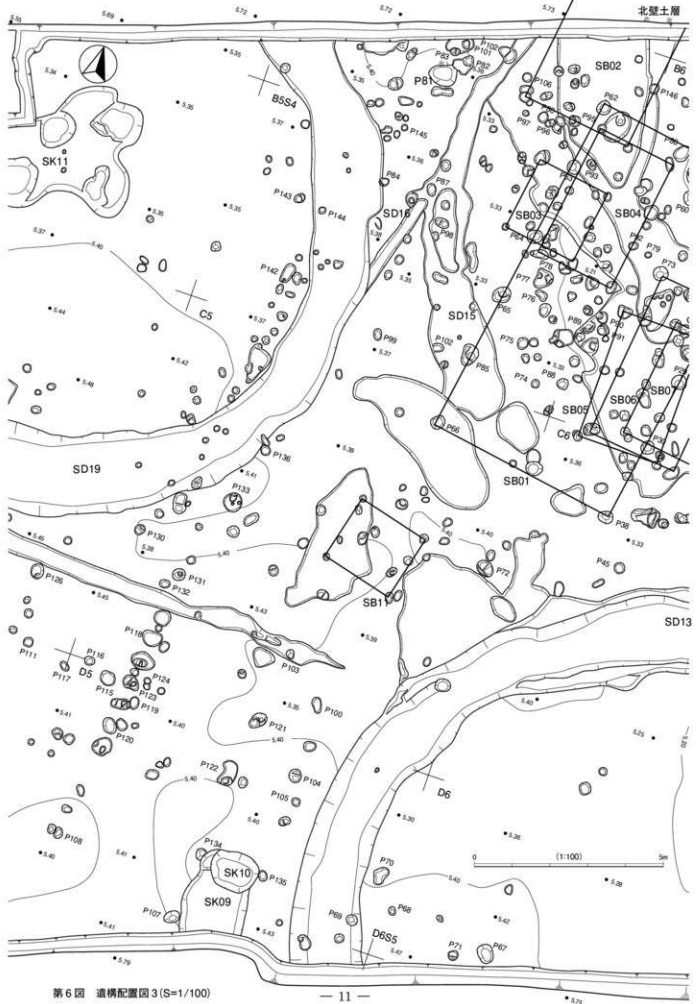
第3図 グリッド配置図 (S=1/400)



第4図 遺構配置図1 (S=1/100)



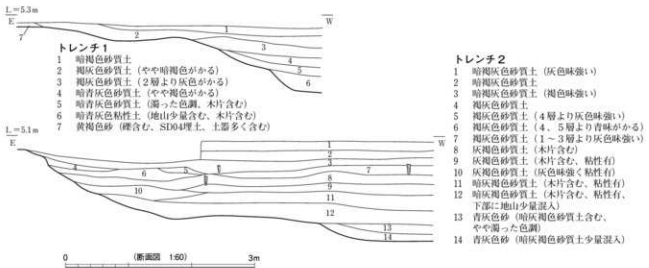
第5図 遺構配置図2(S=1/100)



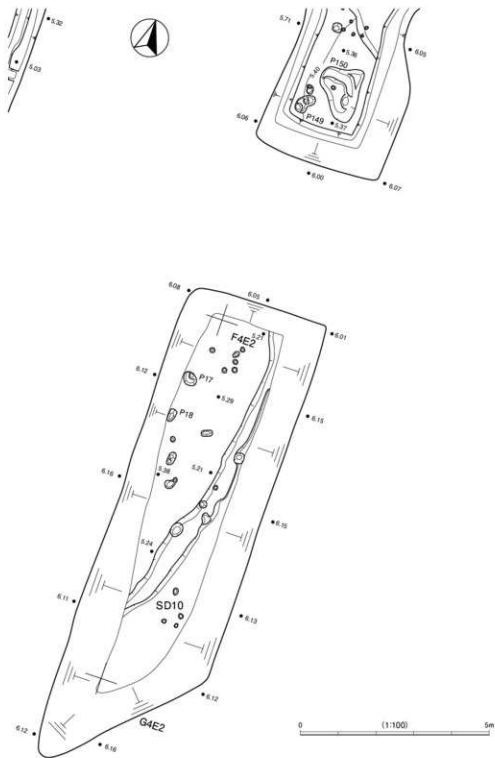
第6図 遺構配置図3(S=1/100)



第7図 遺構配置図4(S=1/100)



第8図 遺構配置図5(S=1/100)、トレンチ断面図(S=1/60)



第9圖 遺構配置圖6(S=1/100)

1.9m、2.1mを測る。P27～30は鞍部上面で検出した。遺物は須恵器、土師器が出土しており古代の建物とみられるが、覆土が灰褐色土主体で、締まりも弱いことから中世まで降る可能性もある。

SB02 B5・6区で検出した2間×1間以上、主軸N8°Eの側柱建物とみられる。北部は調査区外に延びるが、西側桁行の柱穴が検出されていないことから建物と認定するのは難しいかもしれない。柱穴径は25～30cm、深さは10～40cm、柱間寸法は梁行南側柱列が西から1.4m、1.6m、桁行東側柱列が1.7mを測る。弥生時代後期の鞍部を切り込んでいることからそれ以降の建物である。

SB03 B5区で検出した1間×1間、主軸N8°Eの建物である。柱穴径は20～40cm、深さは14～20cm、柱間寸法は2.0mである。出土遺物はないが、弥生時代後期以降の建物であろう。

SB04 B5・6区で検出した1間×2間、主軸N7°Eの側柱建物である。柱穴径は20～50cm、深さは13～25cm、柱間寸法は梁行が2.1m、桁行東側柱列が北から1.7～1.9mを測る。弥生時代後期の鞍部を切り込んでいることからそれ以降の建物である。

SB05 B6区で検出した1間×3間、主軸N7°Eの側柱建物である。桁行東側柱列の柱穴一基は未確認である。柱穴径は20～55cm、深さは9～30cm、柱間寸法は梁行が2.6m、桁行西側柱列が北から1.0m、1.8m、1.8mを測る。弥生時代後期の鞍部を切り込んでいることからそれ以降の建物である。

SB06 B6区で検出した1間×2間、主軸N1°Eの側柱建物である。桁行東側柱列の柱穴一基は未確認である。柱穴径は20～45cm、深さは9～30cm、柱間寸法は梁行2.0～2.1m、桁行西側柱列が北から1.7～1.9mを測る。

SB07 B6区で検出した1間×3間、主軸N7°Eの側柱建物である。柱穴径は25～85cm、深さは6～26cm、柱間寸法は梁行が2.8～2.9m、桁行西側柱列が北から1.1m、1.1m、1.0mを測る。

SB08 B7区で検出した1間×2間、主軸N4°Wの側柱建物である。柱穴径は20～68cm、深さは4～13cm、柱間寸法は梁行が2.0m、桁行西側柱列が北から1.1m、1.3mを測る。出土遺物はないが、その規模と位置的にみて弥生時代の遺構である可能性が高い。

SB09 B6区で検出した1間×2間、主軸N7°Eの側柱建物である。柱穴径は26～56cm、深さは7～36cm、柱間寸法は梁行が2.4～2.5m、桁行東側柱列が北から1.6～2.0mを測る。時期は不明である。

SB10 C6区で検出した1間×2間、主軸N37°Eの側柱建物である。他の掘立柱建物とは主軸が大きく異なる。柱穴径は22～90cm、深さは10～37cm、柱間寸法は梁行が3.3m、桁行北西側柱列が北東から1.8m、1.6mを測る。

SB11 C5区で検出した1間×1間、主軸N14°Eの建物である。柱穴径は17～28cm、深さは3～19cm、柱間寸法は東西列が2.0m、南北列が1.8mを測る。出土遺物はないが、規模がSB03とほぼ同じであるため同時期の遺構である可能性が高い。

2. 古 墳 (第12・13区)

1号墳 (SD13) C5～7区、D5区にまたがって半円形の溝SD13を検出した。南部は調査区外に続いている。上端の最も広い箇所幅356cm、狭い箇所幅150cmを測り、東半部は二段掘り状となっている。深さは20～40cm前後で推移し、東端部で8cmと浅くなって途切れている。その形状と規模、出土遺物などから円墳の周溝と判断される。墳丘や主体部は削平されて遺存しないが、中心部側の周溝下端から復元すると約15mの径が推定される。周溝が東端部で途切れていることに関しては削平された結果とも考え得るが、地形的に落ち込んでいる方向に当たるため当初から掘削されていなかった可能性が高いと考える。周溝内からほぼ完形の須恵器壺が出土した。出土遺物が埋葬当時の供献品ならば6世紀後半の古墳と判断される。

2号墳 (SD19) B・C4、5区にまたがって半円形の溝SD19を検出した。北東部は調査区外に続いている。上端の最も広い箇所幅230cm、狭い箇所幅130cmを測る。深さは20～35cm前後で推移するが、地形的に低くなっている北端部は10cmと浅くなっている。形状と規模、出土遺物などから円墳の周溝と判断される。墳丘や主体部は遺存しないが1号墳と同様に復元すると約13.5mの径が想定される。周溝南西部で底面からやや浮いた位置で第21図26の須恵器高杯と第22図27の壺が並んで出土した。出土遺物が埋葬当時の供献品ならば1号墳同様に6世紀後半の古墳と判断される。

3. 土 坑(第14・15図)

SK01 E2区で検出した。西側は動橋川旧流路によって切られている。短径94cm、長径130cm以上、深さ2～10cmの浅い不整形土坑である。須恵器、土師器が出土している。時期は10世紀以降である。

SK02 E2、3区で検出した。短径156cm、長径280cmの不整形円形で深さは1～10cmと浅い。須恵器、土師器が出土している。時期は10世紀以降である。

SK03 E・F2、3区で検出した。短径120cm、長径310cmの不整形円形で深さは1～10cmと浅く、SK02と類似する。浅い割に出土遺物は多く、多量の須恵器・土師器の他に鉄滓も出土している。須恵器の墨書土器片が判読不明ながら12点含まれる点の特筆される。古手の遺物も含まれるが、回転糸切り痕を持つ土師器皿が出土していることから、時期は10世紀以降とみられる。

SK01～03はいずれも不整形で浅い点で一致し、出土遺物も似通っていることから、溝状遺構の底部が部分的に遺存したものの可能性がある。

SK04 E2区で検出した。西側を動橋川旧流路によって切られているため全形は不明であるが、105×56cm以上の長方形形状を呈している。深さは10cm前後で須恵器が出土している。

SK05 a SK05は同一遺構名を重複して付してしまったため、便宜上a、bに分けて報告する。F3区の農道西側調査区南端で検出した。北側を排水溝掘削により消失してしまった上、南部と東部は調査区外に延びるため形状は全く不明である。深さは9cm以下で浅い。須恵器が出土している。

SK05 b・SK06 C7区で検出した。検出時はSK06と間隙をおいていたが、調査後に連結した。検出時に認識できなかった遺構が両者の間に存在していた可能性がある。幅40～100cmの不整形な溝状を呈し、深さは7～15cmを測る。SK05 b北方に溝状のピットが近接しており、その延長線上のSD12の東側上端が東に飛び出していることから湾曲した溝の底部が断片的に検出された可能性もあり、円墳の周溝である可能性も想定されるが、地形的には小規模な谷筋に当たることからその可能性は低いとみる。切り合い関係からSD12より新しい。SK05 bからは古墳時代後期とみられる須恵器杯蓋小片が、SK06からは弥生土器片が出土した。

SK08 C4区で検出した。160×250cm以上の長方形土坑であり、北側はSD21に切られている。深さは13cm程度と浅く、ほぼ平坦である。須恵器、土師器、緑釉陶器が出土しているが、上層から斜格子と菊花の押印を持つ加賀焼の壺が出土しているため中世の遺構と判断される。

SK09 D5区で検出した。170×210cm以上の略長方形土坑で、深さは5～20cmを測る。北東部をSK10に切られる。南側は排水溝内で取束するか調査区外まで続くか不明である。形状や法量はSK08に類似する。須恵器、土師器に混ざって中世土師器皿が出土していることから中世の遺構と判断される。13世紀中葉以降か。

SK10 D5区で検出した。短径100cm、長径128cmの略楕円形を呈し、深さは26cmを測る。SK09を切っている。中世土師器皿が出土した。

SK11 B4区2号墳中心付近で検出した。短径205cm、長径445cm程度の不整形土坑で底面に4カ所

のピット状の落ち込みが検出された。検出面から底部までは20cm前後、底部からピット状の落ち込み底面までは10cm前後を測る。中世土師器皿や加賀焼が出土している。図示した第28図121の石はSK08出土片と接合したが、図面は接合前の状態である。

SK12 B 6区のSD14内で検出した。短径100cm、長径325cmの溝状の長楕円形を呈し、深さは9～18cmを測る。いくつかのピットと切り合っており、東半部にある二段掘りのピットは本遺構が埋没した後に掘り込まれた遺構と理解されるが、その上層を含む1～3層上面付近にて土器が多く出土した。その土器の出土レベルはほぼ5.0mに前後すること数cm以内であり、本遺構の検出レベル、つまりSD14の底面のレベルに相当することから、本来的にはSD14の遺物であり、下層遺構内に若干落ち込んで出土したものと推定される。

4. 溝(第16～19図)

SD01 D 2区からE 3区にまたがって検出したやや湾曲した溝で、北部及び南部は調査区外へ続く。約20mの長さを確認した。幅は134～230cm、深さは5～13cm程度で推移するが、北端部付近で土坑状に落ち込んでいる。落ち込み部分には杭が穿たれるとともに、礫が入れられていた。D 3杭周辺では底面が一段下がっているが、これは後述するSD18の一部とみられ、土層断面の観察からSD01に先行して掘削されていたことが判明している。最下層に堆積する黄褐色砂から古代の土器が多く出土しているが、珠洲焼や中世土師器皿など12世紀末～13世紀前半の遺物も少量確認されることから中世の遺構と判断される。

SD02 C・D 2区で検出した。2基の溝と1基の土坑が切り合っており、不整形になっている。西側の溝が最も古く、幅85～250cm、深さは3～12cm、長さは8m以上である。北側は調査区外に続き、南側は旧動橋川流路によって切られている。東側の溝は幅72～170cm、深さ10～15cmを測り、北部の底部には道状遺構などに見られるピットを連結させたような溝状の落ち込みがある。北側は調査区外に延びており、ほぼ南北方向に走る延長10.4mを確認した。P16の東側辺りに位置する土坑が最も新しく、短径170cm、長径250cmの楕円形状を呈し、深さは最深部で32cmを測る。覆土は暗灰褐色シルトである。遺物はSD02内土坑として取り上げた。

溝からは円面硯とみられる破片を含む須恵器や土師器、緑釉陶器、円筒埴輪片などが出土しているが、古い混入遺物が多い。時期は溝が10世紀以降で、土坑は11世紀末頃と推定される。

SD03 C 2区で延長約3.5mを検出した。北部は調査区外に続き、南部は旧動橋川流路によって切られており、北西側は溝状に落ち込んでいる。幅170～250cm、深さは6～11cmを測る。検出段階で、SD02より新しいことを確認した。須恵器、土師器、円筒埴輪片などが出土しており、須恵器の墨書土器は7点確認した。うち1点は「天」と判読できるが、そのほか6点は小片で判読できなかった。時期は9世紀後半以降である。

SD04 SD03の北西側に平行して検出されたが、南東側の先端のみであり、北西側は調査区外に延びるため、幅などは不明である。深さは11cmを測る。須恵器や土師器が出土した。時期は9世紀後半以降である。

SD05 C 2区で検出した湾曲した溝である。東部をSD01に切られており全形は伺えない。幅は42～62cm、深さは5cm以下で非常に浅い。須恵器片が出土している。

SD06 E 2、3区境で検出した小溝でSK02に切られている。幅32cm前後、深さ7cmを測る。

SD07 F 3区で検出した。幅48cm、深さ27cmで東側は調査区外に延びる。須恵器墨書土器1点の他、柱状高台をもつ土師器膳具などが出土している。

SD08 F3区で検出した。ほとんどが調査区外であり、東側の上端のみを検出した。深さは9cmを測る。遺物は須恵器と土師器壺が出土した。時期は9世紀後半以降である。

SD09 E2からF3区にかけて延長7.2mを検出した。幅は150cm前後であるが、南東部で幅を減じて収束している。深さは最深部で17cm、南端では2cmとなる。遺物は第2、3層から多く出土しており、墨書土器1点を含む須恵器や土師器、灰釉陶器、円筒埴輪片、鉄滓などを確認した。遺物様相は近接するSK03に類似しており、SK03出土と同一個体の須恵器壺片などもある。時期は10世紀以降である。

SD10 F4区で検出したが調査区が狭いため西側の上端しか確認していない。幅は160cm以上、深さは20cm前後を測る。西側はテラス状に浅く、東側が一段落ち込んでいる。越前焼や加賀焼のすり鉢、中世土師器皿が出土しており12世紀末～13世紀前半頃の遺構とみられるが、肥前系磁器の染付が1点出土していることから、混入かどうか検討を要する。

SD11 東側調査区北東端のA・B7区で延長7.7mを検出した。幅40～56cm、深さ20cm前後を測り、底面の標高は南東から北西へ向かって漸減している。遺物は弥生土器の可能性のある破片を確認している。

SD12 C7区からA6区へ続く延長21.5mを検出した。幅116～170cm、深さ46～75cmを測り、底面の標高は南東から北西へと漸減している。その比高は26cmである。農道東側調査区の中では最も低い場所に掘削されており、通称チャカ山とシロ山の間に入る小規模な谷筋の延長にあたと判断されることから、谷奥からの湧水を導水又は排水するために掘削された溝と推定する。弥生土器が多く出土した。時期は弥生時代後期後半である。

SD14 B5、6区で検出した。溝の名称を付したが、不整形で深さも1～15cmと浅いことから、小規模な鞍部とみられる。弥生土器が出土した。時期は弥生時代後期後半である。

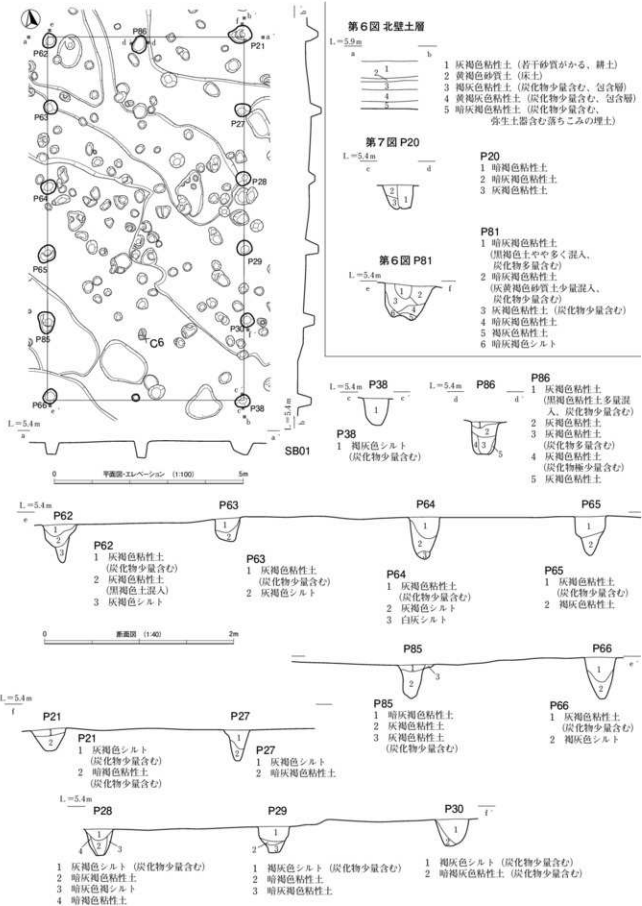
SD15 B5区からB6区にかけて湾曲した延長10.3mを検出した。SD14を切っている。幅28～160cm、深さは1～4cmと非常に浅い。湾曲しているものの幅が狭いことから古墳周溝ではないと判断している。時期不詳の須恵器と土師器片が出土した。

SD16 B5区で検出した。幅30cm前後、深さ10cmの小溝で長さ2.3mを検出した。SD15・19を切っている。須恵器が出土した。

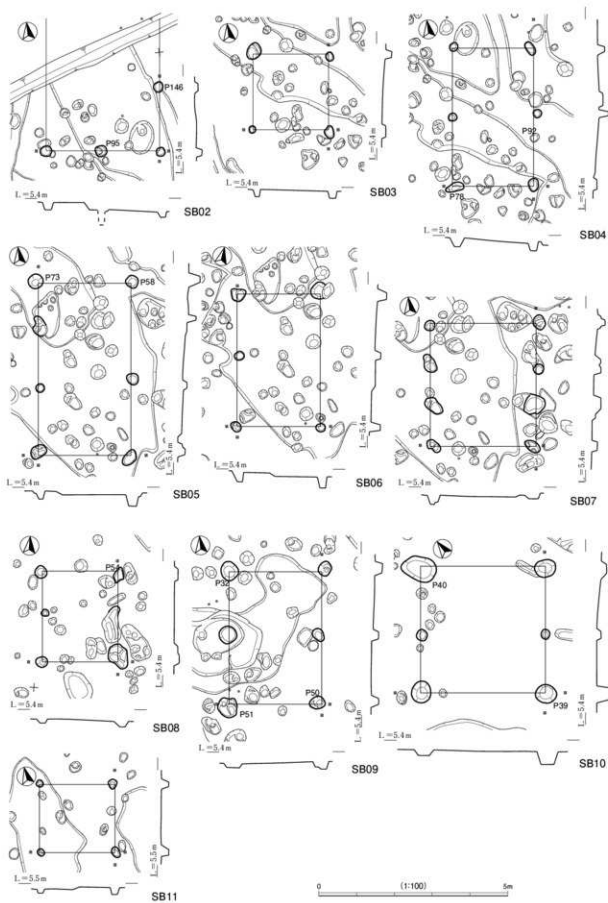
SD17 D4区で検出した。幅74～146cm、深さ2～20cmを測る。

SD18 C2区からE2区にかけて検出した。北側壁面には杭が穿たれているが、農道西側調査区で検出された部分については削平されているためか落ち込みが遺存しておらず、杭列のみを検出した。南側の壁面に関してはSD01底面で検出しており、農道東調査区で確認した南壁と結んだラインで復元される。幅は4～5mに復元され、深さは20～30cmを測る。土層の観察からSD01より古いと判断されるが、13世紀後葉以降の遺物が出土しており、出土遺物から見た新旧関係が合わない。その上、近世以降の遺物が2点のみであるが出土していることから、SD01とともに近世以降の遺構となる、或いは上面に別の近世遺構が切り合っていた可能性がある。他に混入であるが、円筒埴輪片や灰釉陶器片が出土している。

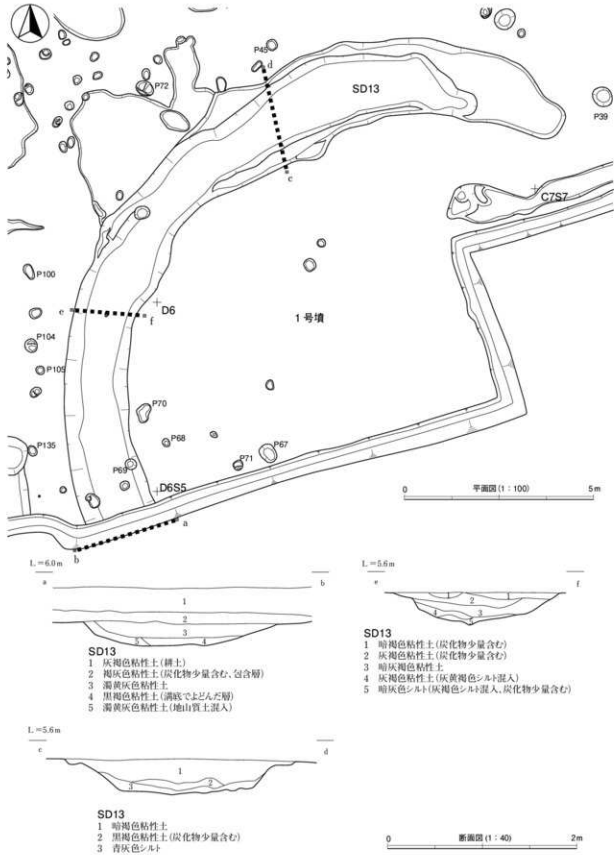
SD20～22 SD20・22は2号墳周溝内側で、SD21はC4、5区で検出したカクランである。



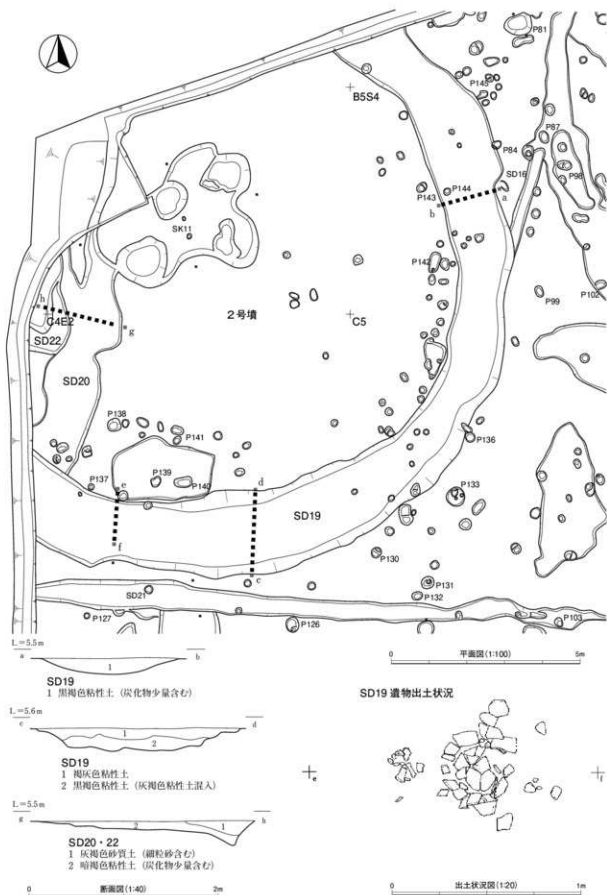
第10図 遺構図1 (S=1/40、1/100)



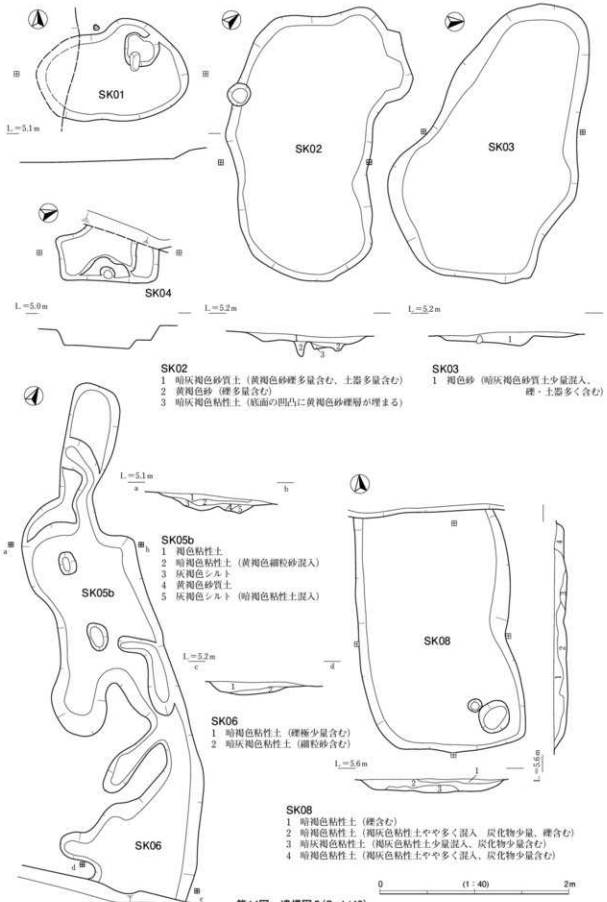
第11図 遺構図2(S=1/100)



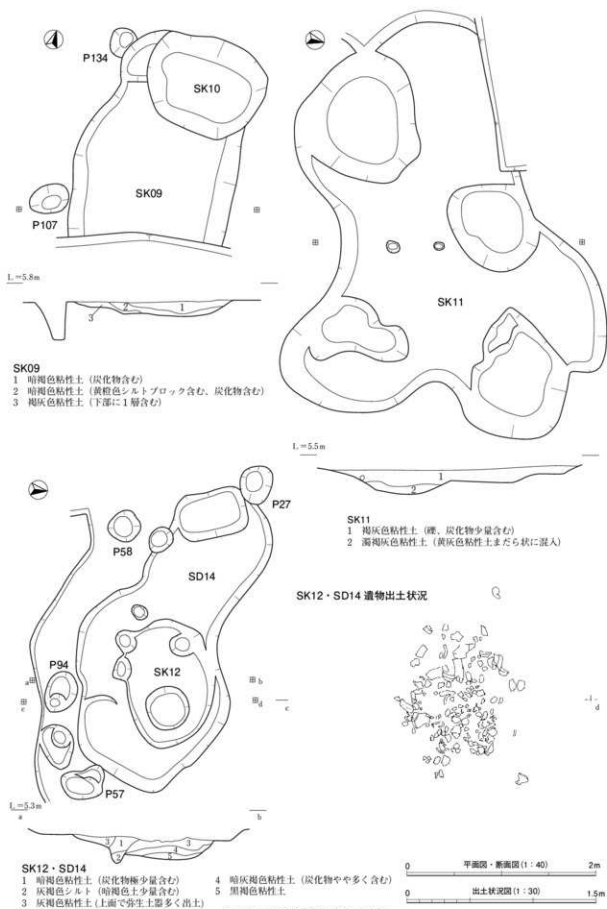
第12図 遺構図3(S=1/40, 1/100)



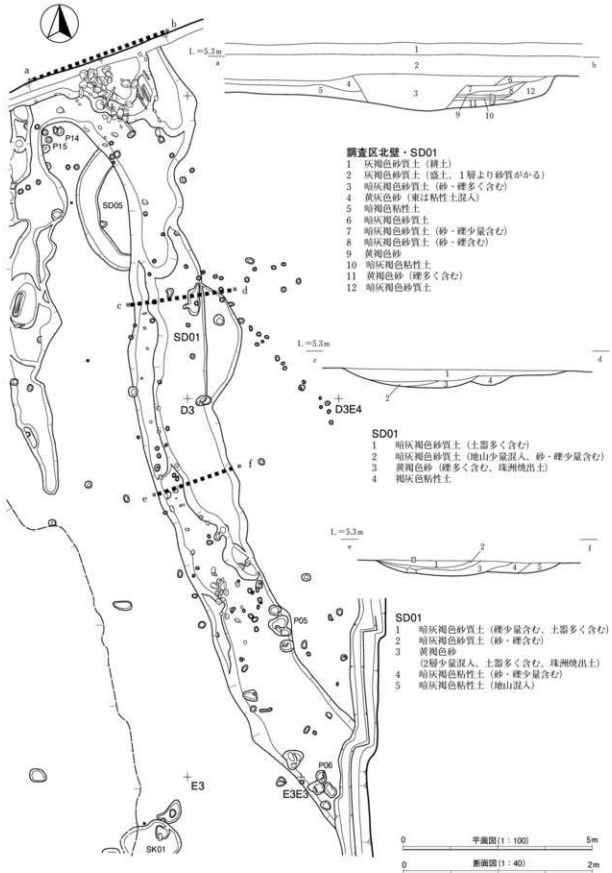
第13図 遺構図4(S=1/20、1/40、1/100)



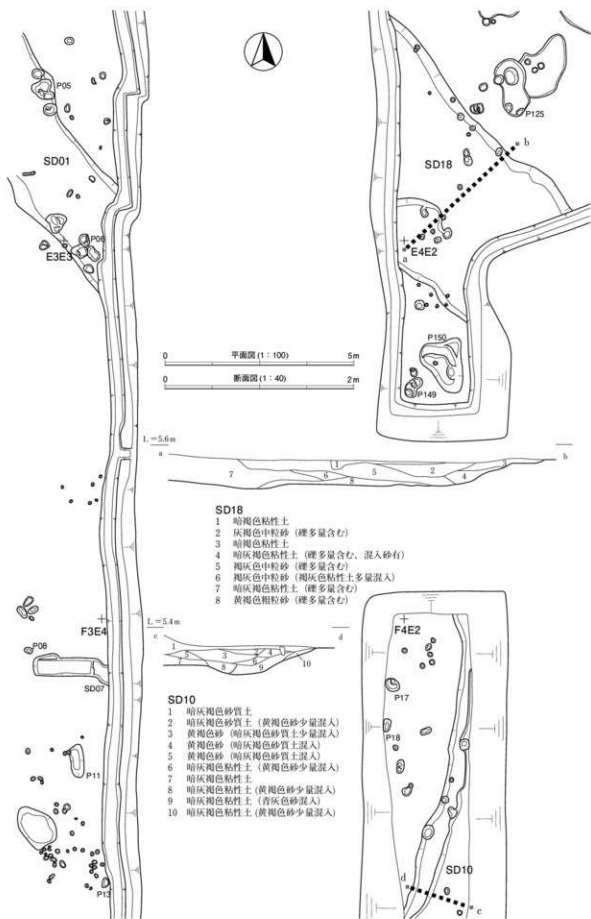
第14図 遺構図5 (S=1/40)



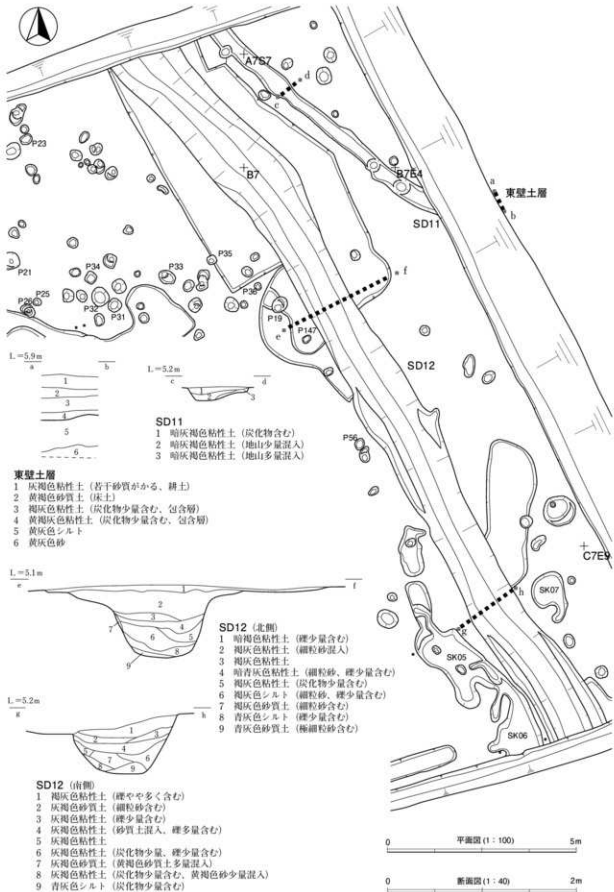
第15図 遺構図6 (S=1/30、1/40)



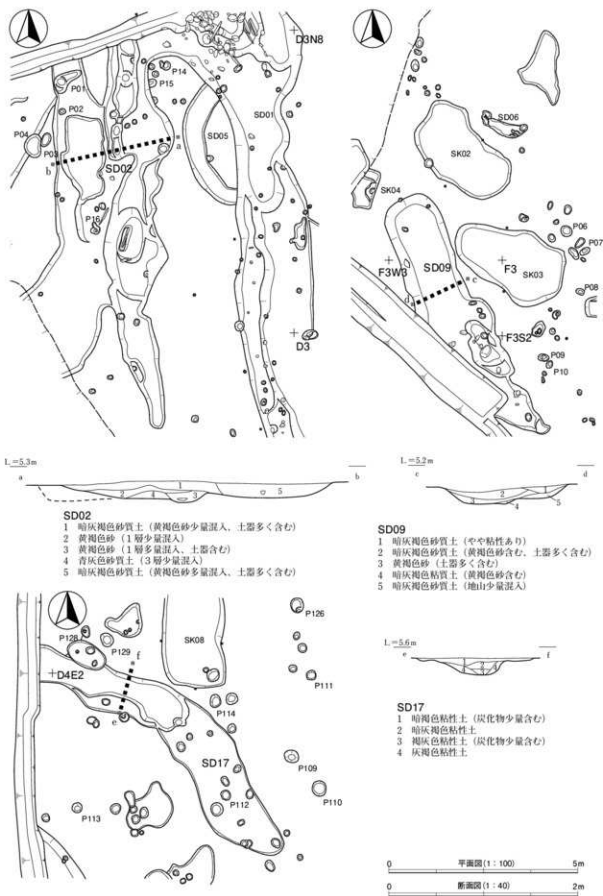
第16図 遺構図7(S=1/40、1/100)



第17図 遺構図8(S=1/40、1/100)



第18図 遺構図 9(S=1/40、1/100)



第19図 遺構図10(S=1/40、1/100)

第4節 遺物 (第20～28図)

弥生時代の遺構から出土した遺物を第20、21図1～20に図示した。1～12はSK12出土遺物である。1、2は甕口縁で、1は図示していないが胴部内面にケズリ調整が施される。2は口縁外端部をやや外反気味に取めるもので、内面には明瞭な指頭圧痕が残る。5～7は有段口縁壺で、4の底部は5と同一個体の可能性がある。8～10は高杯。11、12は蓋とすると口縁部が内湾しすぎるため小型の台付鉢と判断した。13～20はSD12出土遺物である。13～15は甕、16～18は底部、19は器台、20は高杯、21は台付鉢である。13～15は外面にススが付着し、13内面下半部にはコゲも見られる。16も外面にハケが観察され、被熱痕がみられることから甕であろう。18は壺の底部とみられるもので、底部内外面に指頭による調整痕が観察される。19はミガキを丁寧に施してあるが、上から見ると脚の取り付け位置が中心からかなりずれており、丁寧な造りとは言い難い。20は器表が荒れており、調整等の遺存状態はよくないが、部分的に赤色に発色している箇所が観察されることから、赤彩されていた可能性がある。以上の土器は弥生時代後期後半の法仏期に比定され、その中でも新しい時期の遺物とみられる。

古墳時代の遺構から出土した遺物を第21、22図22～27に図示した。22～25は1号墳周溝出土の須恵器で、24については取り上げ時のラベル記載が「SK13」となっていたが、SK13は存在しないため「SD13」の書き間違いと判断して掲載した。22、23は小型の壺で、23はほぼ完形、22も口縁部の一部を欠く程度である。口縁形態、ケズリ調整に若干の違いはあるものの法量はよく似ている。22はやや長めの頸部に、胴部最大径をほぼ中心に置く球形の胴部を持つ。外面口縁下半から胴部下半までカキメ調整を施し、底部付近は回転ケズリ調整とする。23は22よりやや口径が広く、短めの頸部に最大径をやや上方に置いた球形の胴部を持つ。カキメは同様に施されるが、胴部下半は手持ちケズリ調整が為されている点で異なる。24は杯蓋で、天井部と口縁部の境に稜線が走り、口縁端部は内傾する段が作り出される。天井部外面にはやや粗雑なヘラケズリ調整を施し、同内面には当て具痕がナゲ消されずに残っている。田嶋編年の4様式Ⅱ期頃に比定されようか。26、27は2号墳周溝出土須恵器である。26は無蓋の高杯で、短めの脚に3方向の長方形透かしが一段入る。4様式Ⅱ期に取まる資料であろうか。27は中型壺で、やや重心を下にした求胴形の胴部を持つ。26と共に並び置かれていたことから同時代の製品とみられる。

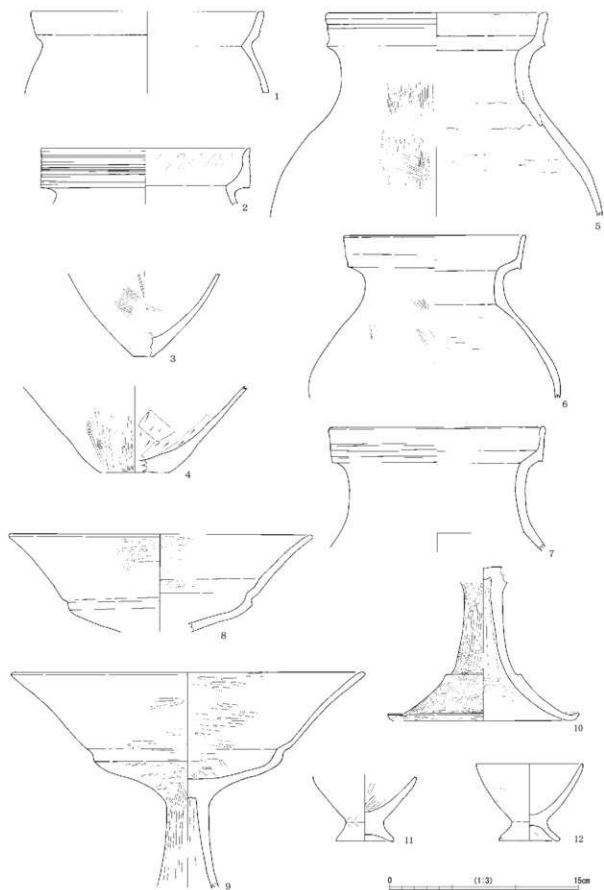
古代の遺構から出土した遺物を第22～24図28～66に図示した。そのうちの28～38は土坑出土遺物である。28～30は土師器椀・皿類で、底部外面に回転糸切り痕がみられる。SK02出土の29は椀とも皿とも言える器形であり、時期は判然としなが10世紀前半くらいに位置付けておきたい。SK04出土の須恵器杯36は内面に漆が付着している。39～42、44、45、47～51はSD02出土遺物である。39、40は混入の円筒埴輪片である。共に外面は赤色に焼けているが、断面及び内面は灰色を呈し、硬質に焼けている。特に後者は調整も丁寧に須恵器工人が製作している可能性もあるが、赤色を意識して焼成しているとみられることから、土師質としておきたい。41は三角形と推定される透かしを3方向に持つ須恵器の大型脚である。脚部外面はカキメと波状文が巡らされる。脚基部外面は段状を呈しており上面に剥離痕が認められることから壺が接合されていたと推定され、脚部壺の破片と判断される。49～51は土師器煮炊具で、49の羽釜鈹部には図示していないがハケ調整が観察される。43、46、52はSD02内土坑出土である。52は白磁碗底部で11世紀末～12世紀代の製品である。53～61はSD03出土遺物で、53は土師質の円筒埴輪片である。54、55は須恵器有台杯、56～58は須恵器無台杯で、56内面には全面に漆が付着している。62、63はSD09出土の土師器の椀、皿で共に底部には回転糸切り痕を残す。

中世の遺構から出土した遺物を第25、26図67～89に図示した。SD01からは67～76、101～113が出土し、このうち67～72の須恵器は混入である。73は白磁碗Ⅱ類の底部、74は口縁端部の面取りが明瞭な手捏ね土師器皿である。77～84はSD10出土遺物である。77は混入とみられる須恵器大甕である。頸基部の粘土接合箇所が剥離している。79～82は手捏ね土師器である。81、82の大皿は体部外面に一段のナデを施し、口縁端部外面を丁寧に面取りするタイプであるが、同じく大皿の79はナデが明瞭ではなく器高もやや高い。前二者には胎土に少量の砂粒が含まれるが、後者には全く含まれず水篩したような精良な土が用いられており、色調も異なる。80の小皿は色調が79と異なるものの砂粒を含まない精良な胎土や外面のナデが明瞭でない点で共通する。これらの土師器皿は12世紀末～13世紀前半頃とみておきたい。83、84は加賀焼で、83は斜格子とみられる押印が確認される甕肩部片である。84は内外共にハケ調整を施した片口鉢である。

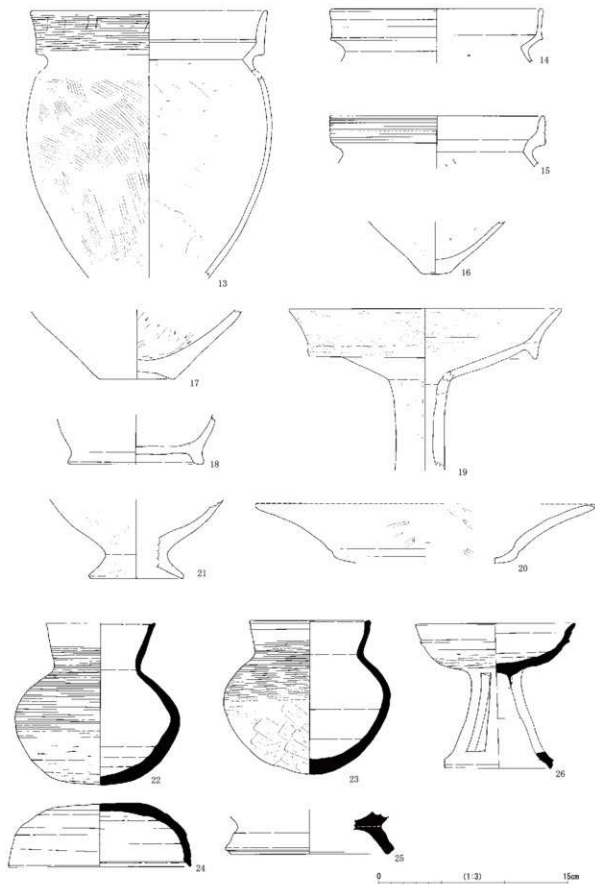
包含層、遺構検出時の遺物などを第26図90～100に図示した。92は須恵器の筒型器台である。上方には長方形、下方には三角形透かしが配され、長方形透かしの上、及び三角形透かしの下には沈線が巡るが、残存部片外面には自然軸が掛かっており明瞭ではない。6世紀前半頃の所産とみられる。第23図41の脚付壺と同じ古墳に据えられていたものかもしれない。93は須恵器杯蓋で、天井部内面に「米」とみられる墨書が確認される。「米」墨書は近接する松山C遺跡で多く出土しており、流れ込みかと推定されるが、図示した以外にも判読不能ではあるが墨書土器の小片が約20点出土しており、松山C遺跡と有機的な関係が推定される。94は須恵器杯蓋で天井部と口縁部の境を浅い沈線で表し、口縁部端部は内傾する段を作りだしている。天井部外面にはやや粗雑なヘラケズリ調整が施されている。97、98は中国産の青磁碗である。97の内面には割花文、98の内面には型押しの浮文がみられる。

木製品を第27、28図に示した。102～114はSD01から出土した。102～112は杭であり、下端に明瞭な加工痕が顕著に認められる。113、114は上・下端部に両側からの切り込みが認められる。断面の形状は長方形を呈し、厚み5～6mmを測る。115、116はSD10から出土した。115は曲物の底板で厚み1.3cmを測り、右側面には長さ2cm、幅4mmの釘の痕跡が1箇所確認できる。116は板状の木製品で厚み1.1cmを測り、左側面を欠く。上半部と下半部で幅が異なるようで、下端部に被熱痕がある。

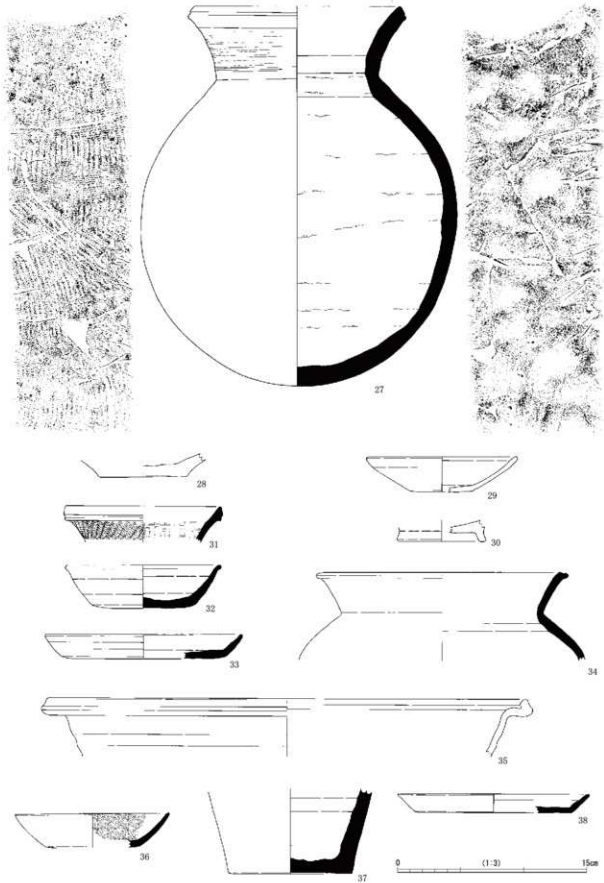
鉄滓・石製品を第28図に示した。117、118は鍛冶滓である。117はSD19から出土し、底面は楕形状を呈する。左側面が部分的に生きており、炉の形状を示すものと判断できる。表面に5mm～1cm前後の木炭痕が確認できる。118はSD18から出土した。破面が目立ち、右側面に木炭痕が顕著に認められる。119はSD17、120がSK03から出土した緑色凝灰岩で、玉造りに利用されていたものと考えられる。121はSK11から出土した凝灰岩で、破面を除いて全体に煤が付着している。



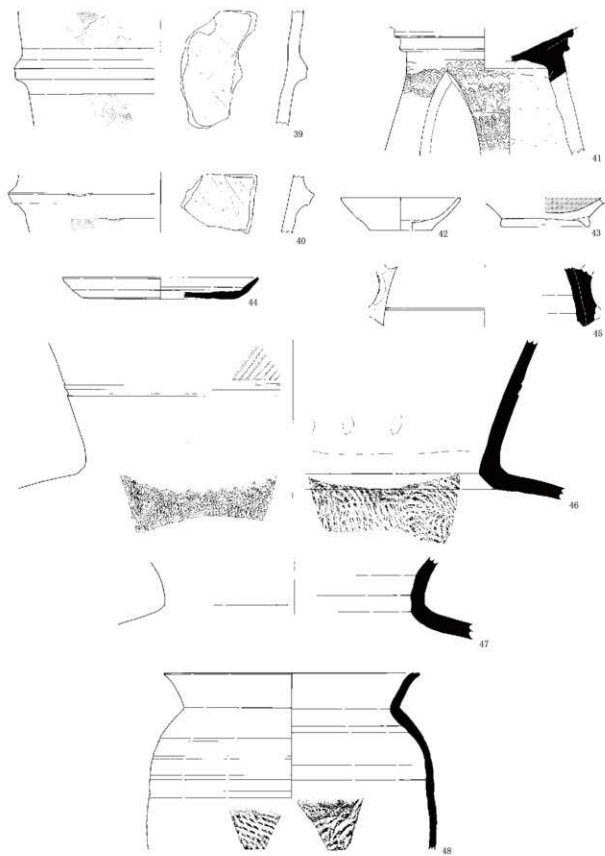
第20図 出土遺物実測図1 (S=1/3)



第21圖 出土遺物実測図2 (S=1/3)

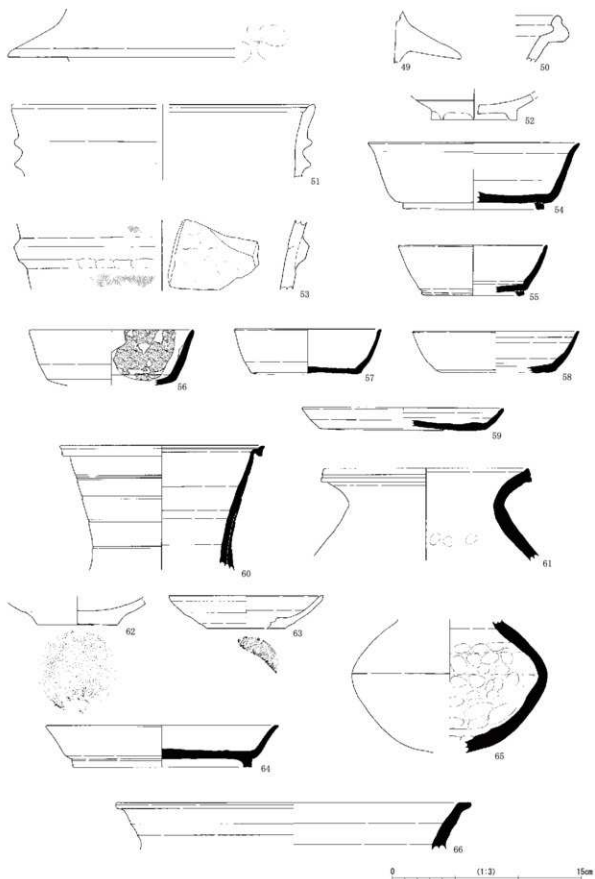


第22図 出土遺物実測図3 (S=1/3)

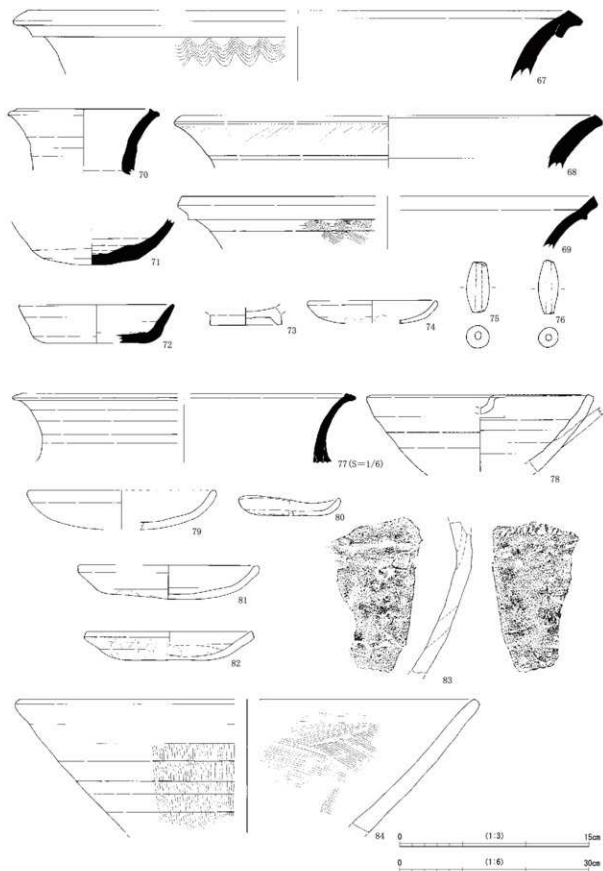


0 (1:3) 15cm

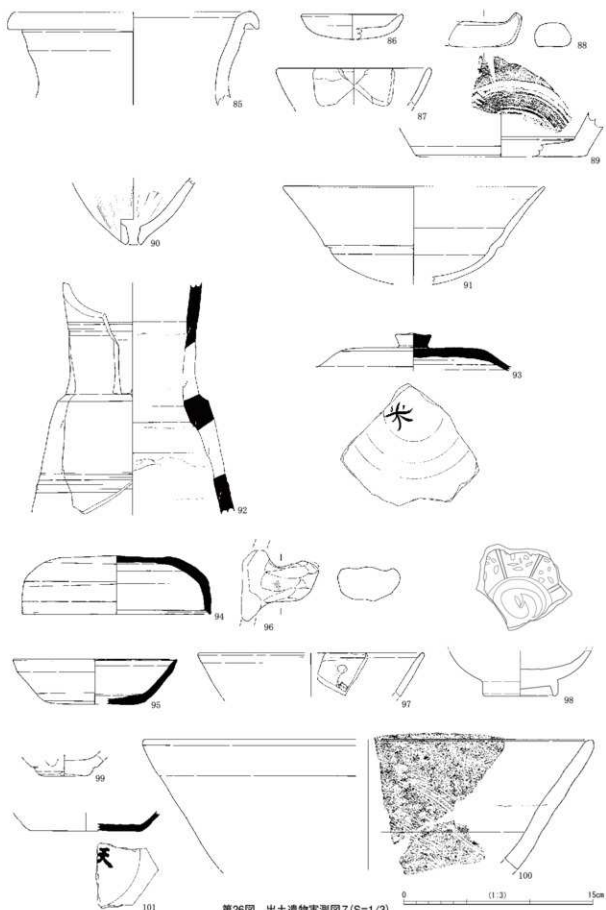
第23圖 出土遺物実測図4 (S=1/3)



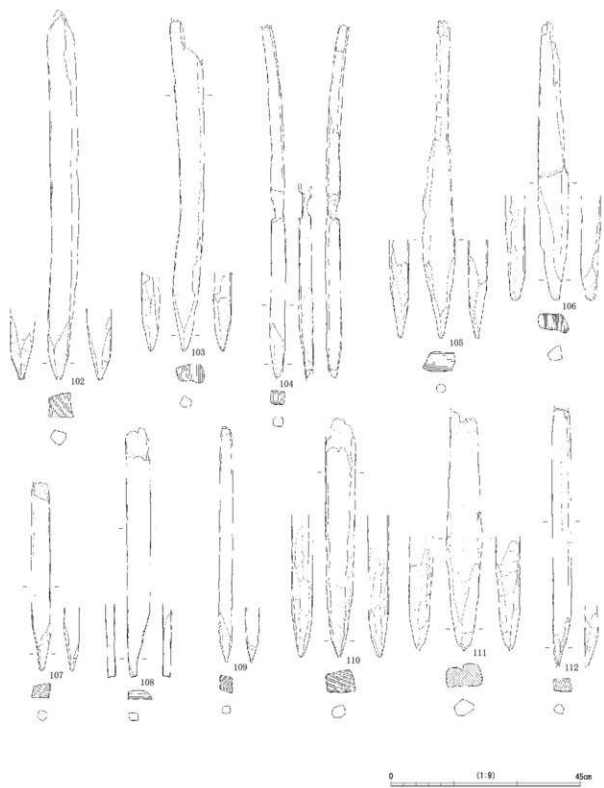
第24図 出土遺物実測図5 (S=1/3)



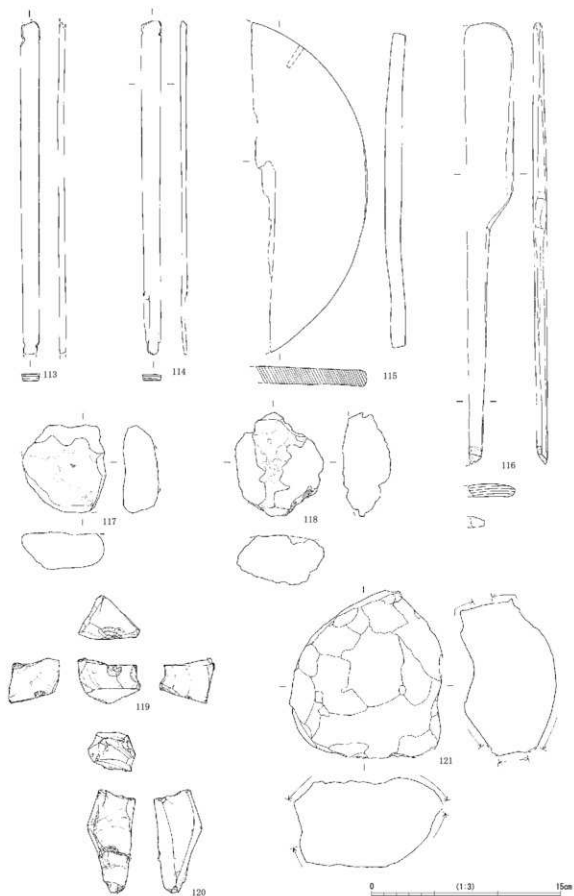
第25図 出土遺物実測図6 (S=1/3, S=1/6)



第26図 出土遺物実測図7 (S=1/3)



第27図 出土遺物実測図8 (S=1/9)



第28図 出土遺物実測図9 (S=1/3)

第3表 遺物観察表①

観測番号	出土地点	遺種	種類	1層	底層	高さ	色調(内面)	色調(外面)	胎土	構成	備考	実測番号
1	B 6区SK12、アゼ1・3層、上層	甕	甕	18.4	-	(6.5)	にじみ黄褐色	灰黄褐色	硝子含、粗砂多含	良		D32
2	B 6区SK12アゼ1・3層、取上2	甕	甕	16.6	-	(4.5)	淡黄褐色	淡黄褐色	硝・粗砂多含	良	瓶内破	D26
3	B 6区SK12上層	灰部	甕	-	1.6	(6.6)	黒褐色	淡黄褐色	硝子含、粗砂多含	良		D25
4	B 6区SK12	甕	甕	-	5.6	(6.9)	灰	淡黄褐色	硝子含、粗砂多含	良		D24
5	B 6区SK12取上1	甕	甕	17.2	-	(16.2)	淡黄褐色	淡黄褐色	硝子含、粗砂多含	良	瓶内破	D20
6	B 6区SK12アゼ1・3層	甕	甕	14.3	-	(12.9)	淡黄褐色	淡黄褐色	硝子含、粗砂多含、赤色粒含	良		D30
7	B 6区SK12取上2	甕	甕	17.0	-	(9.9)	灰白	灰白	硝子含、粗砂多含、赤色粒含	良	瓶内破	D21
8	B 6区SK12取上1・2	高杯	甕	23.9	-	(7.8)	淡黄褐色	淡黄褐色	硝・細砂含、赤色粒多含	良		D22
9	B 6区SK12アゼ1・3層、取上1、上層	高杯	甕	27.5	-	(17.2)	灰白	にじみ黄褐色	粗砂多含、細砂多含	良		D29
10	B 6区SK12取上3、アゼ1・3層、上層	高杯	甕	-	15.2	(12.2)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝・赤色粒多含、硝・細砂多含	良		D31
11	B 6区SK12取上1	小型甕	甕	4.6	-	(5.1)	灰白	灰白	硝子含、粗砂多含	良		D23
12	B 6区SK12アゼ1・3層	小型甕	甕	4.6	8.4	6.1	淡黄褐色	淡黄褐色	硝子含、粗砂多含	良		D28
13	B 7区SD12下層	甕	甕	18.5	-	(21.3)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝・細砂多含、赤色粒・海緑質許少含	良	瓶内破	D12
14	B 7区SD12下層	甕	甕	16.6	-	(4.3)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝・粗砂・赤色粒多含、細砂多含	良		D15
15	B 7・C 7区SD12下層	甕	甕	16.9	-	4.1	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	粗砂多含、細砂多含	良	瓶内破	D14
16	C 7区SD12下層	甕	甕	-	2.4	(4.2)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝・粗砂多含、細砂・赤色粒含	良		D16
17	C 7区SD12	灰部	甕	-	5.9	(6.5)	灰白	淡黄褐色	硝・粗砂多含	良		D98
18	B 7区SD12下層	灰部	甕	-	10.8	2.9	淡黄	淡黄	硝・細砂、赤色粒多含、硝子含	良		D13
19	A 6・7区SD12下層	甕	甕	21.3	-	(12.8)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	粗砂含、細砂・赤色粒多含	良		D11
20	B 7・C 7区SD12下層	高杯	甕	(26.8)	-	(4.7)	淡黄褐色	黒褐色	硝子含、粗砂少含、細砂多含	良		D97
21	B 7区SD12下層	鉢	土師器	-	-	(6.3)	黒褐色	黒褐色	硝・粗砂多含、細砂多含	良		D96
22	D 5区SD13(排水溝)	小型甕	土師器	8.6	12.1 (排水)	12.8	灰	灰	硝・細砂多含	良		D18
23	C 6区SD13灰面	小型甕	土師器	9.4	12.2 (排水)	12.2	灰	灰	硝子含、粗砂少含、細砂多含	良		D17
24	C 7区SK13	蓋	土師器	14.3	-	5.1	灰	灰	硝・黒色粒少含、細砂多含	良		D84
25	D 5区SD13上層	鉢	土師器	-	12.3	(3.4)	灰白	灰白	硝・黒色粒少含、細砂多含	良		D19
26	C 4区SD19取上2	高杯	土師器	12.5	8.5	(11.6)	灰	灰	硝・細砂多含	良		D37
27	C 4区SD19取上1	甕	土師器	16.3	24.9 (排水)	30.1	灰黄	黄灰	硝・粗・細砂多含、黒色粒少含	良		D36
28	E 2区SK01	桶	土師器	-	7.0	(18.5)	淡黄褐色	淡黄褐色	細砂少含、赤色粒含	良		D1
29	E 2区SK02	桶	土師器	11.7	5.1	2.8	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝・黄土粒・赤色粒多含、細砂多含	良		D3
30	E 2区SK02	桶	土師器	-	7.1	(1.7)	灰褐色	にじみ黄褐色	硝・黄土粒・赤色粒含、細砂多含	良		D2
31	F 2・3区SK03	甕	土師器	12.2	-	(2.9)	灰	粗灰	硝・細砂多含	良	液状文	D9
32	F 3区SK03	杯	土師器	12.1	8.0	3.5	灰白	灰白	硝・細砂・黒色粒含	良		D4
33	F 3区SK03	壺	土師器	15.5	13.0	2.0	灰	灰	硝子含、細砂多含	良		D5
34	F 2・3区SK03	甕	土師器	18.7	-	(2.0)	灰	灰	硝・細砂多含、黒色粒含	良		D6
35	F 2・3区SK03	壺	土師器	37.8	-	(4.6)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	細砂多含	良		D7
36	E 2区SK04	杯	土師器	12.1	7.4	(2.7)	灰黄	灰黄	細砂多含	良	内面漆付者	D8
37	F 3区SK05、F 3区輪出灰	瓶	土師器	-	9.8	(6.8)	灰	灰	硝・細砂多含	良		D95
38	F 3区SK05	壺	土師器	15.0	12.4	(1.5)	灰	灰	粗砂少含、細砂・黒色粒含	良		D10
39	C 2区D02西側	輪軸	土師質	-	-	(9.1)	灰黄	にじみ黄褐色	粗砂少含、細砂多含	良		D61
40	C 2区D02西側	輪軸	土師質	-	-	(4.6)	黄灰	にじみ黄褐色	硝砂少含、細砂多含	良		D63
41	C 2区D02下層、E 2区F 2区SK03	罎	土師器	12.4 (蓋部)	-	(9.9)	灰白	灰白	硝子含、粗・細砂、黒色粒多含	良	液状文	D53
42	C 2区SD02下層	罎	土師器	10.4	4.8	2.6	にじみ黄褐色	淡黄褐色	粗砂少含	良	瓶内漆付者	D62
43	C 2区SD02内土坑	桶	土師器	-	6.8	(2.4)	黒	にじみ黄褐色	硝・細砂含	良	内照	D58
44	C 2区SD02	壺	土師器	15.4	12.4	1.7	灰白	灰白	硝砂少含、粗砂含、細砂少含	良		D56
45	C 2区SD02西側	双耳瓶	土師器	-	16.0 (排水)	(4.6)	灰	灰白	粗砂少含、細砂多含	良		D60
46	C 2区SD02内土坑	甕	土師器	33.0 (排水)	-	(12.6)	灰	灰	硝・粗・細砂多含、黒色粒含	良		D54
47	C 2区SD02西側	甕	土師器	20.6 (排水)	-	(6.5)	灰白	灰白	硝多含、粗・細砂含	良		D55
48	C 2区SD02	甕	土師器	20.0	-	(14.0)	灰白	灰白	硝子含、粗砂多含	良		D51
49	C 2区SD02	羽蓋	土師器	-	26.0 (排水)	(4.2)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝子含、粗砂多含	良		D64
50	C 2区SD02アゼ東上層	罎	土師器	-	-	(3.7)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝子含、粗・細砂多含	良		D57
51	C 2区SD02西側	鉢	土師器	(24.0)	-	(5.8)	にじみ黄褐色	淡黄褐色	硝子含、細砂多含	良		D59
52	C 2区SD02内土坑	瓶	白磁	-	6.8	(2.0)	茶褐色	灰白	-	-		D52
53	C 2区SD03	輪軸	土師質	-	-	(5.6)	淡黄褐色	淡黄褐色	硝少含、粗・細砂、赤色粒含	良		D71
54	C 2区SD03	杯	土師器	16.6	11.2	5.3	灰白	灰白	硝子含、粗・細砂含	良		D65
55	C 2区SD03	杯	土師器	11.6	8.2	4.0	灰白	灰白	硝・細砂多含	良		D73
56	C 2区SD03	杯	土師器	12.8	(10.2)	(4.4)	淡黄	灰白	硝・細砂多含	不良	内面漆付者	D72
57	C 2区SD03	杯	土師器	11.4	6.7	3.6	灰白	灰白	硝・黒色粒少含、粗・細砂多含	良		D66
58	C 2区SD03	杯	土師器	(13.0)	(9.6)	3.3	灰白	灰白	硝砂少含、粗砂多含、細砂多含	良		D67
59	C 2区SD03	壺	土師器	15.8	13.2	1.8	オリーブ灰	オリーブ灰	硝・細砂多含	良		D68
60	C 2区SD03	瓶	土師器	16.0	-	(9.9)	灰	灰	硝少含、粗・細砂多含	良		D69
61	C 2区SD03	壺	土師器	16.2	-	(7.3)	灰	灰	硝少含、粗・細砂多含	良		D70
62	F 2・3区SD09	桶	土師器	-	6.3	(2.2)	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	硝子含、細砂少含	良	瓶内漆付者	D74

報告番号	出土地点	菌類	種類	11月	直径	菌高	色調内面	色調外面	胞子	焼成	備考	実測番号
63	F 2 - 3区SD09	膜	土師器	12.2	6.2	2.6	にぶい黄緑	にぶい黄緑	細砂少含	良	回転未切り	D75
64	B 5区SD15、排水溝	盤	灰土器	18.3	14.2	3.4	灰	灰	粗・細砂多含	良		D33
65	B 5区SD15、C 5 - 6区輪出地面	壺	灰土器	-	15.5 (排水)	(3.6)	灰白	灰白	粗砂少含、細砂多含、黒色粒含	良		D27
66	B 5区SD15	甕	灰土器	28.0	-	(3.7)	灰白	黄灰	粗・細砂多含、黒色粒含	良		D34
67	C 2区SD01	甕	灰土器	43.0	-	(5.6)	灰	灰	砂少含、粗砂多含	良	流状文	D42
68	C 2区SD01石・枕形中澤	甕	灰土器	32.7	-	(4.2)	黄灰	灰黄	砂含、粗砂多含	良		D46
69	D 2 - 3区SD01、C 2区SD02	甕	灰土器	32.6	-	(4.2)	灰	灰黄	粗砂多含	良	流状文	D45
70	C 2区SD01	瓶	灰土器	10.4	-	(5.2)	灰白	灰白	砂少含、粗砂多含	良		D43
71	D 2 - 3区SD01	甕	灰土器	-	7.6	(3.7)	灰白	灰白	粗・細砂多含	良		D44
72	D 2 - 3区SD01	杯	灰土器	12.2	8.1	3.1	灰	灰	砂少含、粗砂多含	良		D48
73	C 2区SD01	桶	白磁	-	5.7	(1.4)	茶地・灰白	-	-	-	輪：透明	D40
74	D 2 - 3区SD01	瓶	土師器	10.0	-	(1.8)	にぶい黄緑	淡黄緑	粗・細砂含	良		D47
75	C 2区SD01	土師土師器	-	-	4.0 (排水)	-	にぶい黄緑	-	粗砂含、細砂多含	良	孔径5mm、重量 10.14g	D41
76	D 3区SD01南端	土師土師器	-	-	4.3 (排水)	-	にぶい黄緑	-	粗砂少含、細砂多含	良	孔径5mm、重量 8.69g	D77
77	F 4区SD10	甕	灰土器	(51.5)	-	(11.0)	黄灰	黄灰	粗・細砂多含、海綿質針含	良		D49
78	F 4区SD10	片口鉢	珠洲	18.0	-	(6.1)	灰	灰	粗砂多含、細砂少含、海綿質針含	良		D78
79	F 4区SD10	土師土師器	14.6	-	3.2	にぶい黄緑	にぶい黄緑	赤色粒・海綿質針少含	良		D81	
80	F 4区SD10	土師土師器	7.8	4.5	1.6	にぶい黄	にぶい黄緑	細砂少含	良		D82	
81	F 4区SD10	土師土師器	14.0	11.5	2.7	にぶい黄緑	にぶい黄緑	粗・細砂、赤色粒少含	良		D83	
82	F 4区SD10	土師土師器	13.1	6.0	2.3	にぶい黄	にぶい黄緑	赤色粒・海綿質針少含	良		D80	
83	F 4区SD10	甕	加賀	-	(12.4)	灰黄	灰	砂、粗・細砂少含	良	押印	D50	
84	F 4区SD10	すり鉢	加賀	(36.0)	-	(10.9)	淡黄	灰白	砂含、粗・細砂多含	良		D76
85	D 4区SD18ア北	壺	加賀	19.0	-	(7.4)	灰白	灰白	黒色粒多含	良		D35
86	B 4 - C 4区SD20	土師土師器	7.8	-	2.0	にぶい黄緑	にぶい黄緑	粗砂少含、細砂多含	良		D38	
87	C 4区SD21	丸瓶	瀬戸・瓦倉	11.8	-	(3.0)	茶地・灰白	-	-	-	輪：にぶい黄陶 ~淡黄	D39
88	F 3区P11	把手	土師器	-	(5.8) (排水)	-	にぶい黄緑	-	粗砂多含、赤色粒含	良		D86
89	C 5区P118	すり鉢	越前	-	13.6	3.6	にぶい黄緑	にぶい黄緑	砂、粗・細砂、黒色粒含	良	おろし目	D99
90	B 5 - 6区包含特	有孔鉢	養生	-	1.2	(5.3)	灰白	灰	粗砂多含	良		D88
91	B 5 - 6区包含特	高杯	養生	20.6	-	(7.8)	淡黄緑	淡黄緑	砂・焼土塊含、粗砂・赤色粒多含	良		D87
92	D 3区輪出地面	酒杯	灰土器	-	(18.4)	陶灰	陶オリーブ	砂・細砂、黒色粒多含、焼土塊	良		D100	
93	E - F 3区輪出地面	甕	灰土器	-	(3.0)	灰	灰	砂含、細砂多含	良		D94	
94	去土除去	甕	灰土器	14.4	-	4.7	灰	灰	砂・古色粒含、細砂多含	良		D93
95	E - F 3区輪出地面	杯	灰土器	12.9	8.0	3.6	灰白	灰白	砂含、粗砂多含	良		D91
96	D 4区輪出地面	把手	土師器	-	(5.6) (排水)	-	にぶい黄緑	-	砂・焼土塊含、粗・細砂、赤色粒多含	良		D90
97	D 4区輪出地面	瓶	青磁	(17.7)	-	(3.5)	-	-	-	-	輪：オリーブ輪	D89
98	D 4 - 6区輪出地面	瓶	青磁	-	5.5	(3.6)	-	-	-	-	輪：オリーブ輪	D92
99	D 4 - 6区輪出地面	大目	瀬戸	-	4.0	(1.7)	茶地・灰白	-	-	-	輪：黒陶	D85
100	D 4 - 6区輪出地面	すり鉢	加賀	(35.6)	-	(10.3)	灰白	灰黄陶	砂、粗・細砂多含	良		D79
101	C 2区SD03	杯	灰土器	-	(8.6)	(1.6)	灰	灰	砂・細砂含	良		D101

第4表 遺物観察表②

報告番号	出土地点	種類	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	実測番号
102	C 2区SD01枕17	枕	97.9	6.5	6.2	-		本2
103	C 2区SD01枕20	枕	(78.6)	7.3	4.5	-		本9
104	C 2区SD01枕16	枕	(83.9)	5.5	4.5	-		本5
105	C 2区SD01枕8	枕	(75.6)	7.8	4.7	-		本8
106	C 2区SD01枕3	枕	(66.2)	7.5	4.7	-		本6
107	C 2区SD01枕11	枕	44.8	4.5	3.6	-		本3
108	C 2区SD01枕9	枕	(59.3)	5.9	2.2	-		本7
109	C 2区SD01枕14	枕	56.2	3.5	4.3	-		本4
110	C 2区SD01枕18	枕	(56.8)	7.2	5.5	-		本1
111	C 2区SD01枕6	枕	57.0	8.7	5.8	-		本11
112	C 2区SD01枕15	枕	(61.0)	4.6	3.2	-		本10
113	C 2区SD01	不明	(26.3)	1.5	0.6	-		本13
114	C 2区SD01	不明	26.4	1.6	0.5	-		本14
115	F 4区SD10	器物	26.1	(9.2)	1.5	-	破断	本15
116	F 4区SD10	硯	35.0	4.0	1.1	-	下端部焼熟	本12
117	C 5区SD19上面	鉄秤	7.0	6.7	3.2	165.2	銅造秤	金2
118	D 4区SD18ア北	鉄秤	8.2	7.0	3.8	205.6	銅造秤	金1
119	D 4区SD17	石秤	4.6	5.0	3.5	52.7	緑色陶灰岩	石2
120	F 3区K03	石秤	3.6	3.8	3.1	80.1	緑色陶灰岩	石1
121	B 4区K11	不明	13.3	12.1	7.6	1300	銅造尺、外面磨付	石3

第4章 総括

本遺跡では、弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺構を検出した。標高が古墳周辺で5.4m前後、SD12と動橋川の旧流路周辺で5.0m前後を計測し、2基の円墳を境に北東側で弥生時代、南西側に古代・中世の遺構が分布していることから、旧流路で形成された狭小な微高地上に各時代の建物や古墳が集中して立地していたことが明らかとなった。以下に遺跡の変遷を示す。

弥生時代

建物(SB02～11)や溝(SD12・14)を検出した。

SB02～11の柱穴の埋土は暗灰褐～褐灰色粘質土を基調とし、弥生土器が出土することから弥生時代の建物と判断した。規模は2間×1間以上が1棟(SB02)、1間×1間は2棟(SB03・SB11)、1間×2間が5棟(SB04・SB06・SB08・SB09・SB10)、1間×3間は2棟(SB05・SB07)で、梁間1間×桁間1～3間が主体である。建物の主軸はN7～8°EがSB02・03・04・05・07・09と最も多く、N1°EがSB06、N4°EがSB08、N37°EがSB10、N7～8°EがSB11である。切り合いのある建物はSB02・03・04とSB05・06・07であり、それぞれ2回の建て替えを想定できる。主軸の近いSB06とSB08、SB09とSB02・03・04・05・07は同時期の可能性がある。また、主軸は異なるが、SB03とSB11は規模がほぼ同じであることから同時期の可能性がある。他にも柱痕跡の断面を呈する柱穴を確認していることから、建物はさらに増える可能性が高い。時期は全て弥生時代後期後半以降と考えられる。

SD12は農道東側調査区の中では最も低い場所に掘削されており、ごく小さな谷筋の延長部にあたると思われることから排水溝と判断した。SD14は溝状の土坑であり、その内部でSK12を確認している。SD12・14、SK12からは弥生時代後期後半の土器が多く出土している。

本遺跡周辺における弥生時代の遺構の確認例は、他の時代と比べるとさほど多くなく、その意味で貴重な調査成果といえる。

古墳時代

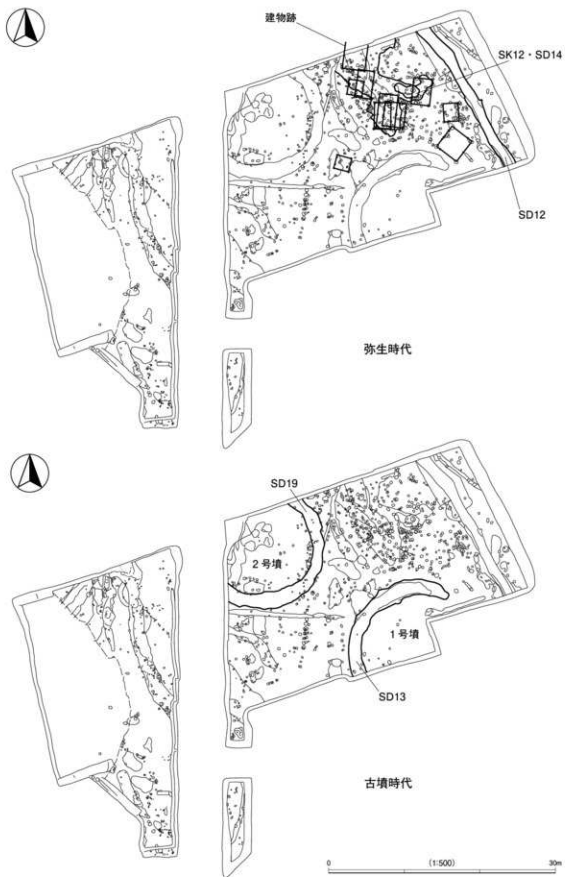
古墳2基を検出し、周溝のみ確認している。

1号墳は径15mの円墳である。周溝SD13は深さ20～40cm、調査区南壁で幅2mを計測する。周溝から須恵器の小型の壺(22・23)や杯蓋(24)が出土している。法皇山横穴古墳群第23号横穴出土の短頸壺は、器形や調整(体部外面下半のケズリ)が23と似ており、時期は6世紀後半～末とされている。また、二ツ栗東山5号窯跡Ⅵ次床資料は、口径(14～15cm大)・器形(口縁端部に内傾する面状の段をもつ)・調整(天井部外面の粗いケズリ)が24と似ており、時期はTK43型式後半～TK209型式前半とされている。したがって、1号墳の時期は6世紀後葉と考えられる。

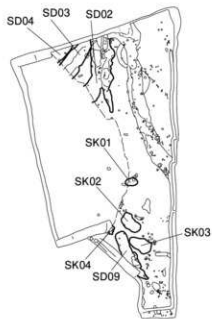
2号墳は径13.5mの円墳である。周溝SD19は幅2m、深さ20～35cmを計測する。周溝から須恵器の高杯(26)や壺(27)が出土している。26は長めの脚部に方形の透かしを一段もつもので、23・24よりも古い様相を呈しており、2号墳の時期は6世紀中葉～後葉と考えられる。

他に古墳時代の遺物としては、土師質の円筒埴輪3点(39・40・53)・装飾脚付壺(41)・装飾器台(92)などの須恵器が出土している。本遺跡の周辺には、6世紀後半～7世紀前半とされる分校窯跡群や、古墳時代後期の須恵器が採集されている松山窯跡群があり、隣接するこれらの窯で焼かれた製品が本遺跡に運ばれた可能性がある。

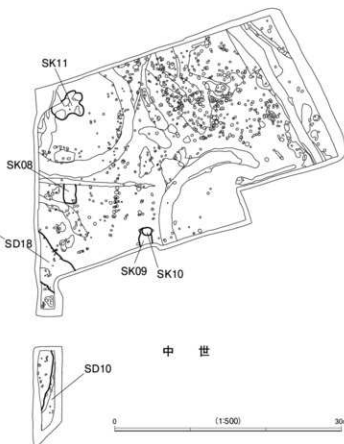
松山・分校地域の古墳時代後期の古墳には、須恵器・土師器・管玉・勾玉・ガラス玉・金環・直刀・



第29図 遺構実測図1 (S=1/500)



古 代



中 世

0 (1:500) 30m

第30図 遺構変遷図2(S=1/500)

刀子が出土した分校山王古墳群や、円墳3基が確認された分校チャカ山西麓古墳群などがある。これら段丘上や山裾に立地する古墳群に加え、今回の調査で円墳2基が確認されたことは、現在水田として利用されている低地においても、さらに多くの古墳群が存在していた可能性を示している。

また、本遺跡の北200mにある松山C遺跡で須恵質の円筒埴輪が出土している。

古 代

掘立柱建物(SB01)、土坑(SK01～04)、溝(SD02～04・07・09)を検出した。

SB01は2間×5間の側柱建物で、主軸がN9°E、面積は50.44㎡である。柱穴は径30～60cm・深さ22～40cmで、円形の掘方を呈する。梁方向の柱筋がやや乱れている。

土坑や溝は農道西側調査区にある旧動橋川流路の東端に位置し、北半部にSD02～04、南半部にSK01～03やSD09がある。SK01～03は坑底に細かな凹凸の目立つ土坑で、深さ10cm以下と浅いが、出土遺物は多い。SK03からは墨書土器が12点出土している。SD02からは円面硯とみられる須恵器や緑釉陶器、SD03からは墨書土器が7点出土している。また、SD09からは墨書土器や灰釉陶器の他、SK03出土と同一個体の須恵器壺が出土している。土坑や溝の主な時期は9世紀後半～10世紀で、SB01も同じような時期と考えられる。

本遺跡の北にある松山C遺跡では、江沼を示す可能性のある「米」墨書土器が多量に出土しており、江沼郡関係の官衙もしくは、江沼臣氏の居宅という可能性が指摘されている。本遺跡でも「米」墨書土器が出土していることから、関連が注目される。

中 世

土坑(SK08～11)や溝(SD01・10・18)を検出した。

SK08とSK09は埋土に炭化物を含み、坑底も概ね平坦であることから、墓の可能性がある。SD01は北端で櫓や杭がまとまって出土している。また、SD01・10・18は溝の肩部に杭列を伴うことから、何らかの共通の機能を意図して造られたものと考えられる。SD01から12世紀末～13世紀前半、SD18から13世紀後葉以降の遺物が出土しているが、土層断面ではSD01がSD18より新しいことから、SD01の時期は13世紀後葉以降と考えられる。

参考文献

- 田嶋明人ほか 1971 『法皇山横穴古墳群』 加賀市教育委員会
 田嶋明人ほか 1978 『加賀市分校古窯址群調査概報』 『郷土』 石川県立大聖寺高等学校郷土研究室
 田嶋明人ほか 1978 『江沼古墳群分布調査報告』 『石川考古学会々誌』第21号 石川考古学会
 中西洋司ほか 2001 『加賀市松山C遺跡』 (附)石川県埋蔵文化財センター
 望月精司ほか 1990 『二ツ梨東山窯跡・矢田野向山古窯跡』 石川県小松市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	かがし まつやまDいせき							
書名	加賀市 松山D遺跡							
副書名	一般国道8号(加賀拡幅)改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	谷内明央・岩瀬由美							
編集機関	(財)石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL(076)229-4477 FAX(076)229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	西暦2013年3月29日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
まつやま 松山D遺跡	いしかわけんかがし 石川県加賀市 まつやま 松山町	17206	640000	36度 18分 58秒	136度 23分 24秒	20070420 ～ 20070808	2,030㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松山D遺跡	集落跡、 古墳	弥生時代 古墳時代 古代 中世	建物、土坑、溝 古墳 建物、土坑、溝 土坑、溝	弥生土器、須恵器、 土師器、埴輪、陶磁 器、木製品		墳丘の失われた円墳 の周溝が確認された。		
要約	弥生時代の建物、土坑、溝を検出した。 古墳時代の円墳2基を検出し、周辺から円筒埴輪片が出土した。 古代の建物、土坑、溝を検出し、黒書土器が出土した。 中世の土坑、溝を検出した。							



遺跡遺景（北西から）



東側調査区全景（東から）



SD12(南東から)



SK12・SD14 遺物出土状況(南から)



1号墳（西から）



2号墳（北東から）



SB01(北から)



SD01 遺物出土状況(東から)



西側調査区全景(北東から)



SD01(南から)



SD01(北西から)



SD01土層断面(南から)



SD01土層断面(南から)



鞍部断面(北東から)



SD02～05(南西から)



SK03遺物出土状況(南から)



東側調査区全景(東から)



東側調査区全景(南西から)



東側調査区南半部(東から)



東側調査区北半部(東から)



東側調査区東半部(北から)



東側調査区西半部(北から)



SK12・SD14(北西から)



SK12・SD14土層断面(西から)



SD10土層断面(北から)



SD12土層断面(南東から)



SD12遺物出土状況(南から)



SD12遺物出土状況(北から)



SD12遺物出土状況(南から)



SD12遺物出土状況(南から)



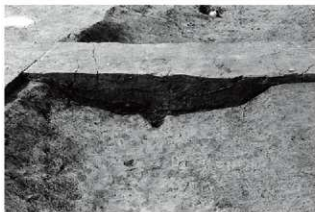
SD12遺物出土状況(北から)



南側調査区全景(北から)



1号墳SD13土層断面(東から)



1号墳SD13土層断面(南から)



1号墳SD13遺物出土状況(北東から)



2号墳SD19土層断面(北から)



2号墳SD19土層断面(東から)



2号墳SD19遺物出土状況(東から)



SK08(北から)



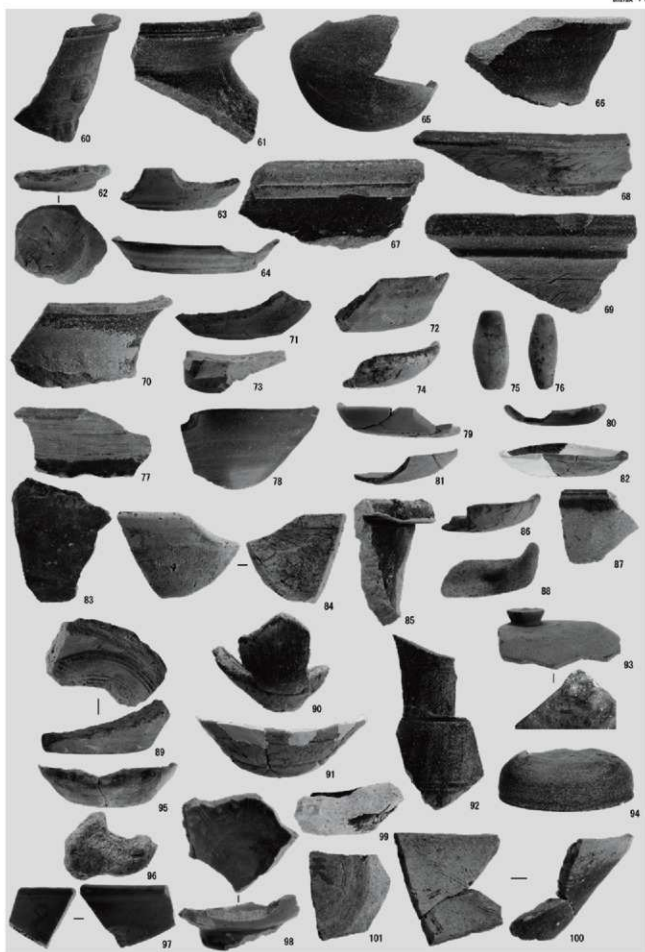
SK09・10(北から)



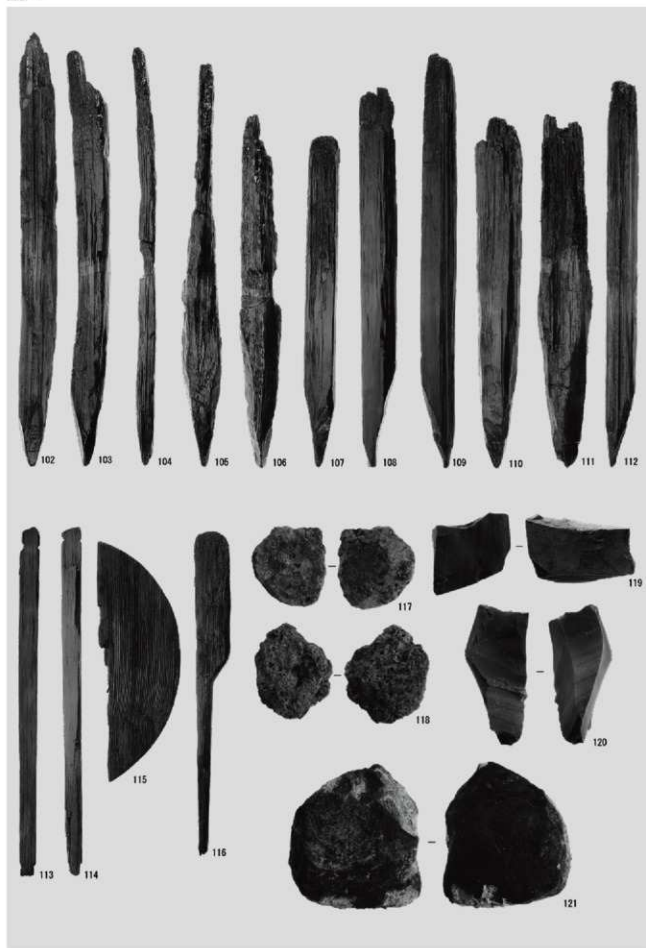
出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4

加賀市 松山 D 遺跡

発行日 平成 25 (2013) 年 3 月 29 日

発行者 石川県教育委員会

〒 920-8575 石川県金沢市鞍月 1 丁目 1 番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

(財)石川県埋蔵文化財センター

〒 920-1336 石川県中戸町 18 番地 1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 ハクイ印刷